

花菜「いつもえがおで、まっけてくれるね。
みんな・・・ありがとう」

花菜「はじめましてーかいせつかかりの花菜です。

このおはなしをてにどってくれてありがとう、うれしいな。

それで、ええと・・・このおはなしには、わたしのかんがえた、

『すまいる』ってうう、ひとひととがなかよくなれる楽しみや、

みんなのころがあったかくなる楽しいことがかかれてるんです。

それで、その『すまいる』は、このおはなしをよんでくれてるひとが、

『すまいる』をつかって、じぶんや、ほんとにたのしむことのできるものなんだ。

『すまいる』も、このおはなしも、みてわかるいきにはならないとおもうし、

みてってもらえて、『すまいる』をたのしんでもらえると、なんかうれしいな

花菜「それでね、この、いまよんでもらってる『あいさつともくじ』には、

このおはなしをよんでもらうってええの、しっておいてほしいことがかいてあるんだ。

そんなにながくないし、よんでってほしいです」

花菜「つぎはさっそく、『すまいる』のしゅうかいつきのもくじだよ。

このおはなしでしゅうかいされてる、

『すまいる』のかかれてるページが、のってるんだ。

もくじには、それぞれの『すまいる』がどんなにかつていうことを、

ちよつともわかりやすくするためのことがかかれてます。

それをみてどの『すまいる』から楽しむか、かんがえてみてね」

あいさつともくじ ↓ O2ページ ↓ あいさつともくじとおはなしのよみかた

花菜「いまよんでくれてる、このことだよ。

もくじから、どのすまいるをえらんでよむかにつかってみてもらいたいな」

おしらせをつくる ↓ O7ページ ↓ たくさんのひとにみてもらうおしらせづくり

花菜「おつたえしたいことを、かみにかいてはったり、くばったりするっていう、

つたえたいことをまわりのひとにいるみるみてもらうすまいるなんだ。

しんぶんとかポスターなんかに、にてるよ。

みのまわりのことや、じぶんのかきたいことや、絵をのせることなんかも

かいてのせるといいかなっておもう。

いろいろなひとでちからをあわせて、みんなでつくりあげることをして、

それでみんながなかよくなれるっていう、そういうよさもあるすまいるなんだ」

ありがとういおう ↓ 17ページ ↓ うれしいことばをたくさんいうとみんなうれしい
花菜「『ありがとう』とか『がんばって』っていいよな、

そういういいことばを、たくさんいうことば、

いろんなひとたちがうれしくなるとか、やるきがでるっていうすまいるだよ。

いろいろなところで、いろいろなひとにつかってもらえるすまいるなんだ。

このすまいるをすることで、すまいるをつかうひとだけとちがって、

すまいるをいってもらうひとたちもいっしょになって、

たくさんのひとがしあわせになれるっていうすまいるなんじゃないかな」

はなながきたとき ↓ 22ページ ↓ 花菜がはじめて楽校にきた日

花菜「わたしがこの楽校にはじめてきたときのおはなしなんだ。

わたしの楽校のみんなのことと、どんな楽校なのかについてかいてあるんだよ。

楽校のみんなが、どんなひとかっていうのと、

どんな楽校かをしりたいひとに、よんでみてほしいな・・・。

このおはなしでは、すまいるのしょうかいは、

あまりかかれてないんだ。ゴメンね。

すまいるのかかっているおはなしをよみたいひとは、そっちをさきによんでみて」

なかまのけんてい ↓ 30ページ ↓ みんなのこのくわしさをこたえあいわかりあう

花菜「いろいろなことのもんだいを、なかよしでだしあうすまいるなんだ。

なかよしになりたいひとのこともっとしりあうとか、

もっとくわしくなりあうのにやくにたつかもしれない。

しらないことをおしえあうとか、くわしさをくらべあうたのしさもあるっていう、

そういうよさも、もってるすまいるなんだよ」

みんなでのにつき ↓ 43ページ ↓ 日記のへんじをみんなでかきあいたのしくなる
花菜「こうかん日記をみんなでするっていうすまいるだよ。

学校や、おうちでつかえるんだ。

みんなでみんなのことをわかりあうっていうよさがあるかな。
つたえておきたいことやナイシヨのことを、ふたりよりおおくのひとたちのあいだで、
つたえあい、しりあい、みんなをわかりあうことができるっていう、
べんりで楽しい、なかよしがもつとなかよしになれるすまいるだとおもうよ
「

みじかいうたかい ↓ 51ページ ↓ みじかい歌を歌ってなかよしでもりあがる
花菜「音楽をながさずに、みじかい歌だけを歌うっていうすまいるだよ。

てがるで、みんなでいっしょにしやすい、ワイワイできるすまいるなんだ。
どうぐをつかわないし、それにどこでもできるし、

きがるにたのしんでほしいな。
ふだんはあまり歌を歌わないひとにも、たのしんでもらえるとたのしいとおもうよ
「

もちよりあつまり ↓ 59ページ ↓ みんなであつまりもちよったものでたのしむ
花菜「なかのいいひとたちで、いろいろなものをもってあつまって、

みんなでいっしょに、もってあつまったもので楽しむとか、
こうかんしあたり、どんなのがすきかっていうことを

みんなでしりあってもらえる、そういうすまいるなんだ。
おかしや音楽や本なんかを、もってあつまるとたのしいかな。

ワイワイしたいひとたちみんなにでもらえるとたのしいとおもうよ
「

たのしみおくるう ↓ 68ページ ↓ たのしんでもらうことでじぶんがうれしくなる
花菜「たのしみたいひととか、さいきんあまりたのしめていないひとたちに、

たのしんでもらえることをするっていう、すまいるなんだ。

絵本をよむとか、歌を歌うとか、がつきをひいてきいてもらうとか、
そういうことをして、たのしんでもらって、それがみんなのすまいるに
なるかなっておもってるんだ。みんなでたのしんでみてほしいな
「

みんなのおはなし ↓ 76ページ ↓ ほんとにいる人がでてくるおはなしづくり
花菜「ほんとうにいるひとたちのでてくるっていう、

そついうおはなしをかんがえてつくるすまいるだよ。

ぜんぶじぶんでかんがえてもいいし、でてくるひとたちを、しりあいのひとにかえるだけでも、たのしいおはなしになるんだ。みんなでじょうだんみたいなの、そういうおはなしをかんがえろとか、きもちのこもったおはなしをかんがえて、それをみたりきいたりしてもらおうと、よろこんでもらえるかなっておもってるよ」

ひとそしてねがい ↓ 87ページ ↓ 花菜が楽校にいかなかった日
花菜「わたしについてのおはなしです。」

このおはなしは、ほかのおはなしをよみおわったあとに
よんでもらいたいなっておもっています」

花菜「ここまでで、もくじと『すまいる』のかいせつはおわりです。
よさそうとおもったすまいるから、よんでみてほしいです」

花菜「それでね、きいてほしいことがあるんだ。
このおはなしでは、よみたいページからよんでいってほしいんだ。
どういうことかっていうと、もくじにかいてあるページのじゅんばんをきにせず、
好きなページや楽しんでみたい『すまいる』のかいてあるページから
よんでいってもらえると、わたしのおもってる、
よんでもらいたいよみかたとおなじで、
もっと楽しめてもらえるかなっておもってるっていうことなんだ。
そういうことで、ページのじゅんばんどおりによまず、
みってくれるひとの好きなように、
よみたい『すまいる』のかいてあるところからよむっていう、
そういうよみかたでよんでみてほしいかな。
ややこしいことってゴメン。でも、そういうよみかたのほうが、
もっとたくさん、このおはなしを楽しんでももらえるかなっておもっています。
それと・・・さいごに『ひとそしてねがい』をよんでもらったほうが
おはなしぜんたいをもっと楽しめるかな・・・」

花菜「あと、これはすぐくつたえたいことなんだけど・・・。
このおはなしでは、わたしのかんがえた『すまいる』っていう

ひとと、ひととがなかよくなれる、たのしいことがたくさんでてくるんだ。わたしとしては、その『すまいる』を、このおはなしをよんでくれたひとに、じっさいにしてみても、楽しんでほしいとおもってるんです。

このおはなしをよんで、そしてそのおはなしのなかにでてくる、『おはなし』を『おはなし』で楽しんでほしい、

このおはなしのホントのよさを

楽しんでもらえるんじゃないかなっておもってます。

だから・・・よむだけでなく、ホントにたのしんでみてください。

そのことをしっておいてください。よろしくおねがいします」

花菜

「はじめにながいことコメントなさい。

じゃ、みなさんがもっとえがおになってくれますように・・・。

このすまいるのおはなし、はじまりはじまりですー！」

花菜 「おひるやすみのじかんになって、

おとねえちゃん、ふみのんちゃん、わたし・・・の3にんはいま、
楽校のしょくどうにいこうとしています。おなかすいた・・・ぐー」

音々 「なな、いっつも、かいせつ、ありがとおなあ」

文乃 「かいせつありがとー、ななちゃん。ウチもおなかすいたわー」

花菜 「これがわたしのやくめだから・・・」

それにしても、楽校のあちこちのかべにはってあるこのかみ、なんなの・・・？
音々 「ううん、せつめいすんのはむずかしいようなかたんなような、なんやけど、

まあそれはな、しんぶん部のつくってる、楽校しんぶんとかいうもんなんやで」

花菜 「楽校しんぶん・・・でもこれ、おとねえちゃんのことばかり、かいてあるよ」

音々 「まあ、ブチヨーのちからで、そういうボクだらけのなかみにされとるみたいやわ」

文乃 「あはははー、ウチらの楽校にはゲンロンのジューがあらへんみたいやねー」

花菜 「なぬ、なんなんだろ？このしんぶん・・・」

おとねえちゃんのシャシンとか、シャシンとか、シャシンとか、がはってあって、
あと、おとねえちゃんへのラヴソングもかいてあるし・・・。

おとねえちゃんのためのコーソクなんていうのもかいてあるよ」

音々 「ボクのことばかりかなくて、なにかんがえとんだか、あのブチヨー」

文乃 「おとねえのことばかりかいてあるのはこまるんやけど、

ふーきーん会でも、なんかこーゆー、しんぶんみたいなんつくれるとーやんねー」

音々 「うん、そやなあ。ふーきーん会のかつどうをかくっていうんもええかもなあ」

文乃 「ななちゃんー、ウチらがこーいうんつくるとして、こんなんつくるとえーとか、
なんかいいすまいる、あらへんかなー？どーかなー？」

花菜 「ううん、そうだね・・・」

・・・おしらせをつくる・・・なんかどうかな・・・」

音々 「おしらせを・・・つくるん？どんなすまいるなんやる」

文乃 「へーおしらせをみてもらうんかー、どんななんんー？どきどきー」

おしらせをつくる ↓ たくさんのひとにみてもらうおしらせづくり

文乃 「おしらせをつくるって、どーいうことなんー？」

花菜 「 ↓ こんなすまいる ↑ っていうのをいうね。

おしらせや、しんぶんや、はりがみをつくって、

そしてそのつくったものを、みぢかなひとに、みせるとか、くばるとかすると、たのしいし、それだけとちがって、やくにもたつかなくておもうんだ。

音々「よおするに、しんぶんのようなものをつくって、」

ほかのひとにいろいろなやりかたで、みてもらうってことやね

音々「そんで、どんなとこがいいとこか、おしえてもらっていい？」

花菜「うん。 ↓ こんないいとこ ↑ はどんなのかっていうと・・・。」

まず、つくりあげるたのしさがあるんだ。おしらせをのせるだけとちがって、じぶんのつくりたいものを見せるとこができて、詩やハイクをのせたり、絵をのせたり、シャシンをのせたり・・・ほかにもいろいろのせられて、それをみてくれるひとに、みてもらえるよ。

みてもらえるとおもってつくるのって、たのしいことだとおもう。

音々「おカタイしんぶんみたいなきじだけとちやうおしらせをつくって、それをみてもらうのをかんがえながらつくるんがたのしんやな」

花菜「うん、そう。つくるおしらせのなかみは、」

おうちのなかでの、こどものことや、ペットのことで、それをおうちにかざっておくとか、おともだちにみてもらうとか・・・、ほかのところにおくなら、部活や課や社のことなんかをかくといいとおもうんだ。それから、福祉施設や学校のきょうしつのなかでのことも、それぞれに、どこかのばしょにおいておくといいとおもう。

そのつくったものをみてもらうのがたのしんかなくておもうんだ」

文乃「いろいろなおいてー、いろいろなひとにみてもらえるすまいるなんやねー」
音々「たくさんのひとにみてもらえるっていうんがええなあ」

文乃「つくるの、たいへんなんー？どんなふうにつくったらええのんー？」

花菜「 ↓ こんないるもの ↑ がどんなのかっていうと、
かんたんにもつくれるし、こったものにすることもできるんだ。

かんたんにてがるにつくってもいいし、てまをかけてホンカクテキなのでもいいよ。エンピツとかみでかいただけでの、ちょっとしたおしらせでもいいし、キカイで編集した、もっとしつかりしたのでもいい。

それと、もとになるつくったかみを、「コピーしてふやすために、
おうちにあるような、かんたんないんさつきをつかってもいいし、
おみせの「コピー機をつかって「コピーしてもいいかな。」

そいだから、カベやコピーしたものを置いておける、みせるところがあればできるよ。みせるところがなければ、みぢかなひとに、てわたしでみせてもいいかな」

音々 「かんだんにも、ホンカクテキにもできるんやなあ。

どっちでもできるなら、つくりたくなるひとがたくさんになりそつやなあ」

音々 「どんなおしらせを、どんなつくりかたでつくとええんやる？」

文乃 「そやなー、そのあたり、きになるわー」

花菜 「ええと、それはね……。 ↓ こんなりかた ↑ をいうね。

おしらせの、かみのおおきさは、おおきくても、ちいさくてもいいんだ。

おしらせは、ひとりでつくってもいいし、みんなでつくってもいいとおもうよ。

ひとりでこだわりをもってつくってもいいし、

みんなでわいわいとたのしくつくってもいい……。

それと、いつつくるかや、つぎのおしらせまでにどれくらいの間をあけて、

あたらしいおしらせをつくるかは、つくるひとにじゆうにかんがえてほしいな。

かくきじは、しんぶんをまねしてもよくて、

しんぶんはだいたいはもじだけだけど、しんぶんのように、おしらせや、

シャシンや絵や四コママンガやニュースやハイクや詩や、

それと……社説のような、いいたいことをかいても、たのしいんじゃないかな。

みてくれるひとたちからもらったかんそうをのせてもいいし、

みてくれるひとに、かんそうとはまたちがう、おんがくのガクフや、

かいてもらったものを、のせてもたのしいよ。

いろは白黒でもいいし、いろがついててもいいとおもう。

音々 「おしらせをつくるとして、ほかにどんなのをかくのんかな？」

花菜 「そうだね……。

おうちにおくばあいは、こどもさんのせいちょうのきるくとか、

今月のばんごはんのよていをーかげつぶんかいておくとか、

かぞくのひとのすることのよていとか、おとうさんのとった、かぞくのシャシンとか、

そういうのをきじにかくとたのしくて、それにべんりだとおもうよ。

学校におくばあいには、ほごしゃのかたむけのきょうしつのできごととか、

えんそくにいったときのことをかいた、せいとさんのさくぶんとか、

ほかに、すきなきゅうしよくのアンケートをのせてもたのしいかもしれない。

福祉施設におくばあいときには、入居者のかたのかいたハイクものせたいし、

こどもさんがあそびにきてくれたときにかいてくれた、にがおえとか、

きせつにあわせたできごとをかくとたのしいかな」

文乃「みせるばしょにあわせて、おしらせにかくことがちごてくるんやー」

音々「んで、さっきいうてみたいに、いちまいだけ、もとになるのをつくって、それを「ピー」してふやしていくんやな」

花菜「うん・・・」

かくことは、ほかのひとにいやなきもちをさせなければ、なにをかいてもいいよ。それと、↓ だいたいなところ ↑ は、楽しいことだけを、のせるといふことがだいじだとおもうんだ。

くらいこと、かなしいこと、いやなきもちになることをのせないようにしてほしいな。それと、みぢかなひとにくぼるとか、手でわたしてみてもらうのがいいとおもう。

カベにはりつけるとか、どこかにおいておくのは、みてもらえないこともあるかも。

でも、おうちや福祉施設では、カベにはりつけても、おいておいてもみてもらえるし、そういう、おくばしょによってかえるところは、

つくるひとに、かいていいことかどうかやを、どういふうにおくかを、

かんがえてみてほしいなっておもうんだ・・・」

笑魅「なるほどっ」

音々「えみ、きいとったんか」

笑魅「きにすんなっ」

音々「どう、きにしいひんのか、よおわからんわ」

笑魅「おしらせっ、つくるのたのしそっ。えみもまぜてっ」

文乃「かまへんよー。みんなでつくったほうがたのしー」

笑魅「あとお、テサキとしてっ、なんにんかつ、よぼっ」

花菜「・・・で、ブチヨークン、タヌキくんにきてもらいました」

部長「いやぁーっはっはっはっはっは。」

らんちたいむに、はうづゆづ。おとねえちゃん、みなさん

珠輝「いやっはあ、きたぞい。たのしいことをやるそっじやお。たのしみじゃわいな」

笑魅「きたかつ、えみのテサキっ」

音々「テサキって、ああたなあ。まあでも、みんなそろったわ」

珠輝「で、どんなおしらせをつくるのかのう？」

花菜「ふーきーん会しんぶん、なんかどうかな」

音々「よさそおやなあ」

文乃「それでいこー」

笑魅「ふーきーん会しんぶんっ、さっそくつくるぞっ」

花菜「・・・で、つくりおわりました」

音々「つくりおわるん、はやっ」

文乃「はなしのすすみかたのツゴージョーやねー」

珠輝「つくるってるとこは、わざわざかいせつしなくてもええんじやるうなあ」

笑魅「そこらへんのこととはっ、いうまでもないっ」

花菜「こんかいのおしらせは、げんこうをかくのに2じかんで、カラーのにしました。そしてコピーしにいてってコピーしおわるに30ぶん、かかりました。

それと、コピーするどうぐは、ブチョーくんのコネでつかわせてもらって、20まいコピーするのにつかわせてもらいました。あとでおれいしよう・・・。

ふーきーん会しんぶんには、いろいろかいてあります。

ふみのんちゃんのかいた、ふーきーん会についてのおしらせだけとちがい、おとねえちゃんの時や、ブチョーくんのとったシャシンものってます。

それと、えみちゃんのかいたゲームについてのコラムも・・・」

部長「花菜クン、かいせつ、てんきゅー！」

笑魅「ありがとガキツ、じゃっガツコウのケイジバンにつ、はりにいこっ」

花菜「というわけで、ケイジバンのまえまできたみんな」

音々「またしても、はなしがすすむの、はやっ」

文乃「またしても、はなしのツゴージョーやねー」

部長「ワタクシ、はっていくのだ」

花菜「ぺたぺたと、はっていつてくれるブチョーくん」

笑魅「はってみるとっ、このしんぶんっ、すごくカッコよくみえるっ」

音々「たくさんコピーした、あまったぶんはケイジバンのまえにおいておくわ」

文乃「みてもらえるのー、たのしみー」

笑魅「あとっ、おいておいたのをっ、もってつてもらえるのもっ」

部長「ケイジバンから、とおくにはなれて、

よんでくれるひとのことをながめることにするのだ」

花菜「ケイジバンからはなれて、とおくからながめるみんな」

笑魅「はやくっ、だれかよめっ」

音々「まだとおくにはなれて10びょうもたってへんがな」

花菜「そしてしばらくして・・・」

文乃「あっ、きたー」

花菜「みてる・・・、よんでるね」

笑魅 「あつ、ああつ、よんでわらってるっ」

花菜 「おいておいたの、もってかえってってくれるかな・・・」

笑魅 「あっ」

文乃 「ああつ」

音々 「おおっ、いちまい、もってかえっていつてくれたっ！」

一同 「いやったあっ！ー！！」

笑魅 「うれしーっ」

音々 「がんばりが、むくわれたきぶん！」

文乃 「よんでもらったうれしさだけとちごて、ウチらが、ひよーかされたきもちーっ」

部長 「ワタクシたちのばあいとちがい、ふつうの学校では、おいておいたのを

もってかえってもらえないこともあるかもしれないのだ。

でも、おうちのなかや福祉施設でなら、ちゃんとよんでもらえるのだ。

おいておいたり、はったりするだけでなく、

ほかに、きょうしつのなかでくぼったり、

ともだちのような、みぢかなひとに手でわたして、

じぶんの目のまえでみてもらえば、それでみてもらいやすくもなるとおもうのだ」

珠輝 「つぎは、みゅーちゃんに、みてもらいにいくかの？」

一同 「れっこっ」

花菜 「と、いうわけで、みゅーちゃんがいるホケンしつへとやってきました」

部長 「いやー！ーっはっはっはっは。あいすていなうなのだ、みゅーちゃん」

音々 「いやは、みゅー」

美優 「みんな~~~~いやっは~~~~」

笑魅 「デカイヒトにつ、きょうはいちおうトクベツについていももってきたっ」

美優 「な~~~~に~~~~に~~~~?まえみたいに~~~~カエルのヒモノ~~~~?」

音々 「まあ、ゲテモノはたべられへんこともないけど、ふつうはひとにあげへんわな」

笑魅 「それっ、まえにバカにくわしたよっ」

文乃 「くわしたんかいなっ」

部長 「いやあー！ーパリパリしてて、おいしかったのだ」

音々 「おいしかったんかい」

珠輝 「みゅーちゃんにの、ふーきーん会しんぶんをみせにきたんじゃ」

花菜 「しんぶんをてわたす、タヌキくん」

美優 「ありがと~~~~。へ~~~~、みんなでつくったんや~~~~」

部長 「いやあー！ーそうなのだよ、みゅーちゃん」

花菜「ふーきーん会しんぶんをよむ、みゅーちゃん。どうおもつかな・・・」

美優「ふんふん~~~~」

花菜「みゅーちゃんがよむのをみまもる、みんな」

美優「ふんふん~~~~、なるほど~~~~」

ふ〜き〜ん、こんなかつどうしてるんや~~~~。しらなかったわ~~~~」

文乃「そやでー。そこ、ウチがかいてんー」

美優「ふ〜き〜ん会つて~~~~、たのしそ~~~~やね~~~~」

若草「そやな。なな、ボクもそおもってもらえて、うれしいきがするわ」

美優「おとねえちゃんの詩~~~~、ごっつえ~~~~で~~~~。

きれいで~~~~、なんてゆ〜か~~~~、

よんだあとにさわやかなきもちになれるわ~~~~」

音々「そおかあ。ボク、ふだん、詩をほとんどひとにみせへんねん。

でもこおやってみてもらえて、それにかんそうまでもらえてうれしいわあ

部長「この詩は、ワタクシへのおもいをつづつたものなのだ」

音々「へー」

美優「ちやうやる~~~~」

珠輝「あきらかにちがうのお」

花菜「すごいカンチガイ・・・」

笑魅「おんどりやつ」

美優「ブチヨ〜くんのフルカラ〜のしゃしん~~~~、じょうずやね~~~~」

部長「いやあ〜〜〜さすがみゅーちゃん、お目がたかいのだ。

これがシャシン部チヨーのジツリヨクなのだ」

珠輝「なんだか、おとねえちゃんをうつしたシャシンばっかじゃのお」

音々「へー」

部長「いやあ〜〜〜アイがつつたわつてくるのだ」

音々「へー」

笑魅「あほんだらっ」

美優「このゲームのきじ〜〜えみちゃん~~~~ゲームがじよ〜ずなんやね~~~~」

笑魅「えっ?うん、まあ・・・」

美優「おかんも~~~~ゲームをちよつとあそぶねん~~~~」

笑魅「そう・・・」

美優「ゲームをじよ〜ずにあそぶコツ〜〜またおしえてや~~~~」

笑魅「はいはいっ!」

部長「ここですきよく。だいめいは、『』メンね、すなおになれなくて『』

珠輝 「その歌、むかしの歌のかしでありそうなことばじゃなあ」

美優 「みんなくよくよこんなすごいのつくれたねくくく」

文乃 「このすまいる、ななちゃんが、かんがえたんやでー」

花菜 「・・・わたし、もとなるすまいるを、すこしかんがえただけなんだ。

げんこうをつくったのは、ほかのひとたちだよ・・・」

部長 「みんながあつまれば、こんなすごいこともできるのだ。

ななちゃんも、つくったひとのりっぱなひとりなのだ。

げんこうをかいたひととも、コピーしたひととも、くばったひととも、ほかにも、

ちからをあわせたみんなが、つくったひとなのだ」

珠輝 「そおじゃのお」

笑魅 「だねっ」

花菜 「・・・」。

音々 「そやな」

花菜 「・・・せーと会も、おしらせをつくってみると楽しいかもしれないね」

笑魅 「いいかんがえっ、だねっ。でっ、つくるならどんなのつくるのっ？」

部長 「では『うふっ、おとねちゃんダイスキ♡らぶらぶファンクラブしんぶん』をば、

せーと会としておつくりするのだ!」

美優 「おとねえちゃん、けんどうぶから、ぼくとっかりてきて〜」

おしらせをつくる ↓ たくさんのおしらせをつくり ↓ おしま

文乃 「えっ、なまえをしらへんてかよってたんー？」

珠輝 「えみちゃんがニューガクガンシヨをどうやってかいたかきになるのう」

音々 「そうようがっこうっていうんやで。カンジでかくと、こっ。蒼遥楽校な。

あおい、に、はるか、ってかくねん。

ブチヨーが、がっこうを楽校ってかくことにコーソクできめたらしいなあ

笑魅 「ぶっ、むずかしいカンジのことをきくとズツウがっ」

珠輝 「おとなになっから、リレキシヨに楽校とかくときにゆうぎがいるわい」

花菜 「あおい、はるか・・・」

花菜 「いまは、たいいくのジュギヨウがおわろうとしていて、かたづけをしてるところ。たいいくのときにはみんな、ちゃんとジュギヨウにしゅっせきするみたい……。いま、おとねちゃん、ふみのんちゃん、わたし……の3にんでいます」

音々 「あんがとお。なののおかげでわかりやすいわあ」

文乃 「かいせつしてくれていつもありがとー。みんな、たいいくはすきなんやねー」

花菜 「かいせつで、やくにたてて、よかった……」

音々 「ななはかんしゃされじょうずやなあ」

文乃 「ほんまやねー」

花菜 「たいしたこと、してないよ……」

文乃 「かたづけ、はよせなあー」

花菜 「えっさ、ほいさ」

音々 「けっこお、たいへんやなあ」

文乃 「がんばってこー」

花菜 「……で、かたづけおわかりました」

笑魅 「あっ、きれいにかたづいてるっ。マジミはっ、かたづけもまじめにやるんだねっ」

文乃 「まー、いちおー、マジミやからかなー」

音々 「ああは、やらへんかったんかいな」

笑魅 「どんまーいっ」

音々 「じぶんでいうか」

笑魅 「ちゃんとかたづけてくれてっ、なんていうかつ、そのっ、ごによごによごによっ」

花菜 「ごによごによごによ……」

音々 「ふふふ、うまくいわれへんねんな」

笑魅 「あんまっいいじんなっ」

文乃 「きもちはずたわってくるでー」

花菜 「???」

笑魅 「えみっ、ありがとうかつ、そういうじぶんのきもちをつ、ほかのひとにっ、どういうふうにいえばうまくいえるかつ、かんがえてるんだっ。

でもっ、どうすればいいのかつ、よくわからないっ」

音々 「うまくきもちをつたえられへんのかあ、そらこまったもんやなあ。

ん、でもボクもそういう、きもちをつたえるの、にがてかなあ」

文乃 「うーん、おとねも、えみちゃんも、あんがいくチベタなんやるかー」

花菜 「……わたしも、じぶんのきもちって、あんまりうまくいえないんだ」

文乃 「ウチもそやわー。みんな、おなじなんやねー」

音々 「そやなあ」

笑魅「ありがとうってきもちのほかもっ、うまくいえないっ」

花菜「わたしも、ほかのことばもうまくいえないな・・・。」

こういう、ちゃんとすなおに、じぶんのきもちをいうのって、
とてもだいじなことだとおもう・・・。」

音々「うん、そういうことをいえるのって、にんげんとして、だいじなことやおもうわ」

文乃「そやねー、こういうことをもっとたくさんいえるようになるといいなー」

音々「りそおといえば、りそおかもしれんけど、でもだいじなこっちゃとおもうで」

花菜「そうだね・・・。」

音々「なな、そういうとこを、すまいるでうまく、なんとかならんやるか？」

笑魅「トガキっ、なんかいいすまいるかんがえてっ」

花菜「ちよつとまってね、かんがえてみる・・・。」

・・・ありがとうを、いえばいいかな・・・。」

笑魅「ありがとういうってっ、なんなのっ？」

文乃「きになるー」

ありがとういうおう ↓ うれしいことばをたくさんいうとみんなうれしい

花菜「ありがとうをいうっていうのは・・・。」

いろいろなひとに、『ありがとう』とか、『いいところあるなあ』とか、

『がんばれー』『きびくによれよ』『すごいっ』『がんばったね』

『じょつすだね』と『うつつな』ことばを、たくさんいおうっていうことなんだ」

音々「そういうことばを、いうんっ」

花菜「うん。そういうことばをふだんからたくさんいうようにきをつけてると、

じぶんのうれしさとか、ありがとうとか、ほかにもいろいろなきもちを、

まわりのひとたちにたくさんいえるんじゃないかなっておもうっていう、

↓ こんなすまいる ↑ なんだ」

笑魅「そういうことかっ」

音々「いつもから、いおういおうと、きをつけるのがだいじてこっちゃんね」

花菜「そうだとおもうよ。それと、いろいろなひとがうれしくなれるとおもうんだ。

いうひともじぶんのきもちを、すなおにつたえられてうれしい、

いわれるひともげんきがでるとか、ほめてもらえてやるきがでくるとか、

いうひともいわれるひとも、どっちもうれしいきもちになれるよ。

イガク部をめざすなら、やるのはあたりまえといえるのだ」

音々「ブチヨーがイシャになると、まちがいない。ひとのいのちがあやうい」

笑魅「バカはバカなのにベンキョーだけでできてモッ、ねっ」

笑魅「ガリベンもベンキョーしすぎやし、『きらくにやれっ』」

音々「たしかにそおやなあ。しんぱいしてくれて、『ありがとお』」

花菜「ところで、なんでブチヨーくんはホウキもってるの?」

部長「これは珠輝クンのあいであなのだ。珠輝クン、こちらへかもん!」

花菜「こちらへ、やってくるタヌキくん」

珠輝「いやっはあ、おわかいの。えみちゃん、いつもべっぴんさんじゃのう」

笑魅「うんっ、よくわかってるねっ、『うれしいなっ』」

珠輝「おとねえちゃん、メガネがあつとるわい」

音々「『うれしい』けど、それはひにくにきこえへんこともないきがするわ。

それとな、ホウキもって、なにしとったん?」

珠輝「これは、せーと会のもよおしで、せーと会で、楽校の、おおそうじをしとったんじゃ」

文乃「いいだしたのは、タヌキくんなんやんねー」

笑魅「シタツパっ、『いいとこあるねっ』」

文乃「そういうことって、だいたいのひとには、『なかなかできることとちゃう』でー」

珠輝「ふおっふおふお。うれしいことをいうてくれるのお。

やつてるやりがいが出てきてうれしいぞな。

笑魅「まあ、このおおそうじも、おんなのこからのヒョー力をよくするためじゃわい」

音々「ほんとのきもちなんだか、なんなんだか」

珠輝「ふおっふおっふおっ」

音々「せーと会って、こういうボランティアのようなこと、

しよっちゆうやつとるやんね。』えらいとおもっわ」

部長「いやあー……っはっはっは」

おとねえちゃんのくちから、そんなあまいせりぶが!」

音々「へー」

珠輝「いまの、あまかったかのお?」

笑魅「あまいでおもいだしたっ。

えみっ、いつもおかしくれてるっ、シヨクドウにいつてくるっ」

文乃「ウチらもいくわー」

花菜「せーと会のみんな、『おおそうじ、ありがとっ。それと、『がんばって』

部長「おまかせありませなのだ!」

それとおとねえちゃん、またなにかあったら、ワタクシをたよってほしいのだ。
おとねえちゃんのためなら、おおそうじなんぞのごとき！なのだ」

音々「へー」

笑魅「ガリベンっ、そこはありがとうっていわなくていいぞっ」

花菜「で・・・いろいろあって、シヨクドウにやってきました」

笑魅「さっそくだけどっ、シヨクドウのチヨールリのひとたちっ、

おいしいゴハンやおかしをくれてっ、『いっつもっ、ありがとう』

部員「ホントっ！？ふふふふふっ、そういつてもらえて、すごくうれしい」

笑魅「えっ、そうっ？

えみはっ、いつもいろいろしてもらってっ、

それでありがとつてっ、あたりまえのおれいをいっただけだよ」

部員「わたしたちは、じぶんたちのつくったものでよるこんでもらえるのが、

イチバンうれしいことなんやわ。ありがとうっていつてもらえるの、

ホンマにうれしいし、それに、がんばりたくなることなんやで。

だから・・・ホンマにうれしい」

音々「そうなんやね。ありがとうが、こんなに、ひとのちからになるんやなあ」

文乃「ななちゃんー、えーすまいるやねー」

花菜「・・・うん」

笑魅「それならっ、3ニンにもいつもいろいろしてもらってるしっ、いっつくっ、

3ニンともっ『ジミなとこっ、もっとががんばれっ』

三人「ってそれ、どういっみやねんっ！」

ありがとういおう ↓ うれしいことばをたくさんいうとみんなうれしい ↓ おしまい

笑魅 「リョーカイっ、えみだよっ、よろしくねっ」

花菜 「うん・・・」

笑魅 「バナナっ、くらいぞっ」

花菜 「バナナくらい・・・？」

音々 「ああ、えみはなんかとへんなあだなをつけるんやわ」

文乃 「ウチは、ミスメガネってえみちゃんによばれとんのやで」

音々 「ボクなんか、えみから、ガリベンっていう、へんなあだなでよばれとる」

笑魅 「バナナってなまえだからっ、にたことばでバナナっ」

花菜 「え・・・それでバナナ・・・」

笑魅 「バナナっ、もつとあかるくいけっ」

花菜 「うん・・・」

音々 「へんなあだなつけとるからやる。むちやいうとるな」

笑魅 「しょうがないなっ、ほらっ、ミソラーメンひとくちやるからゲンキだせっ」

音々 「もちあるいとんのかい、しるもの。しかもやたらでかいどんぶりだ」

文乃 「もらえるの、バナナとちごて、ごめんね」

笑魅 「あはははははっ。ミスメガネっ、うまいっ」

文乃 「えへえへー」

花菜 「・・・」

笑魅 「バナナっ、わらえっ」

文乃 「うーん、ウチ、バナナだけにすべったんかなー」

ななちゃん、バナナのボケ、ネタのつもりやってん、ごめんなー」

花菜 「うん・・・」

笑魅 「バナナとちがうあだなもかんがえとくっ。それとつタカラナボタモチもやるっ」

音々 「かわったなまえのボタモチやな」

花菜 「おとねえちゃん、学校のろうかでなんかさわいでるよ・・・」

音々 「ああ、あれは鱒盛をやっとなのやわ」

花菜 「アジモリ・・・？」

文乃 「ウチらの楽校がいまどんなかんじか、いうところかー」

音々 「そやな。」

まず、チコク、ソウタイ、ケツセキはあたりまえで、

じゅぎょうをうけとるせいとはほとんどおらんのやわ。

んで、センセイはしんようされてなくて、だれもいうことをきかん。

それと、シヨクドウで、ちょうり部がごはんつくってくれたり、

タヌキは、ほんとのなまえはタマキっていうねんで」

笑魅「おんなのこっばいカッコしてるけどっ、おとこだよっ」

珠輝「たまに、おんなのこかと、なまえとふくそうでまちがえられるわい」

花菜「そう・・・。タヌキくん、なんでおんなのこみたいなカッコしてるの？」

珠輝「せーとかいちよーのブチヨーにいわれたからじゃ。」

それと、おんなのこのカッコのほうが、なんだかおちつくからじゃいな」

音々「いうとくけど、タヌキは、かなりのおんなのゴずきやからきいつけや」

花菜「さっき、いろいろいわれた・・・」

珠輝「おどろかせてすまんかったの、ななちゃん」

文乃「タヌキくん、せーと会のフクカイチヨーをしとるねんー」

珠輝「まあ、たいしたことしとるとおもっとくれ」

笑魅「あからさまなウリモンクっ」

花菜「・・・うん」

珠輝「ふおっふおっふお、ななちゃんはしょうじきじゃのう」

文乃「でも、タヌキくんのいいかた、

ネタかどうか、ちよっとわからんいいかたやったでー」

珠輝「ふおふおふお」

花菜「ブチヨーとか、セイトカイチヨーって・・・？」

部長「いやあーはっはっはっは。よくぞきいてくれたのだ。

ぐもにん、おとねえちゃん、みなさん」

花菜「わっ」

音々「いやは。いきなしあらわれた、このひとはブチヨーっていつて、

ボクらの楽校のせーと会チヨーと、いろいろなブカツのブチヨーをやっとるねんで」

部長「いやあーおとねえちゃん、そんなもちあげちゃってー！」

音々「へー」

珠輝「もちあげたかどうかはともかく、あとでたたきおとされるかもものう」

笑魅「バカにっ、アイスやるっ。とけてるけどくえっ」

文乃「って、いらんもん、くわせとるだけやがなっ」

音々「ふくろのなか、かじゅう100パーセントジュースみたいになっとるで」

笑魅「とけまくってベットベトになったチヨコもあるよっ」

音々「もちあるいんとんのかい、とけるようなんばっか」

部長「ではアイスをば、さっそくちようだいさせてもらうのだ。

ごきゅごきゅごきゅ。ぶっはーっ。おーでりいしやす！

うん、このアイス、なんともさわやかなのどごしっ、なのだ」

音々「そのいいかた、アイスっていうより、まるで鰻みたいやな」

花菜「アジ・・・？」

音々「うん、まあ、なあ。鰻」

文乃「鰻、ねー」

部長「それにしても、花菜クンてば、お、と、な、し、そ。なコなのだ。

どこのブカツにはいるかはきめたのですかな？」

花菜「うん・・・」

部長「ふんだらば、かいせつかかりをしていただきたいのだ！」

音々「なんやそら」

花菜「かいせつかかり・・・？」

部長「花菜クンのみのまわりでおこつたできごとを、

かいせつしていく、というかかりなのだ」

音々「けつたいなかりやな」

部長「ためしに、ワタクシのふあっしょんを、かいせつをばしていただきたいのだ」

花菜「ええと・・・、うえもしたも青で、ベルトもネクタイもクツも青で・・・なにこれ？

ぜんぶ青で・・・おまけに、シャツもスボンも、

おなじ青のチェックのからでまとめられてる・・・」

部長「おげー！」

笑魅「へんっ、へんっー！」

花菜「すぐくへんなカッコ・・・」

部長「花菜クン、おげー！のかいせつぶりーずー！」

珠輝「おげっていわれてものう」

花菜「おっけー・・・ってこと・・・？」

部長「べりぎゅー！」

花菜「べりーぐっど」

文乃「ななちゃん、よくわかるねー」

部長「ざっつらいっ！」

では、てんこうきねんに、このせいふくのスカートをば花菜クンにさしあげるのだ。

せひ、みにつけてほしいのだ。はやく楽校のみんなに、なじめるように、なのだ」

花菜「うん・・・」

美優「あれ〜。てんこ〜せ〜？」

文乃「ななちゃんー、かいせつかいせつー」

笑魅 「なにっ『すまいる』ってっ?」

花菜 「みんながもつと、すまいるになれること・・・」

音々 「ほんまやねえ。なながともだちをひるげてったような、

そういうすまいるになれることを、もつとひるげていけるとええなあ」

部長 「それでは花菜クんに、『すまいる』をかんがえるかかりをおねがいのだ」

花菜 「え・・・わたしが?」

美優 「そやなくく、ななちゃんがそういうかかりになると、みんなよろこぶでくく」

花菜 「・・・」。

珠輝 「そういうかかりが、ななちゃんにむいとるとおもうぞな」

花菜 「でもわたし・・・そんなことできない・・・むりだよ・・・」

部長 「せーと会チヨーけんげんで、たったいまきめたのだ。

花菜クンを『すまいる』をかんがえるかかりとするのだ!」

花菜 「・・・」。

笑魅 「バカのいうことっ、むりがちよつとあるっていうかつ、

かなりあるけどっ、でもきまりっ」

部長 「花菜クン、さっそく、いまさっきいった、

なかよしをふやす『すまいる』のかいせつぷりいず!」

花菜 「・・・」。

↓ なかよしをふやす ↑ ・・・。

ともだちをべつのもだちにおしえたり、おしえられたりするといいとおもう。

じぶんひとりでもだちをふやすのは、たしざんみたいなこと。

だけど、ともだちのもだちをおしえてもらうのは、

かけざんみたになかよしがいっぱいにふえていくんだ・・・。

なかよしがたくさんになる・・・」

部長 「『すまいる』のかつせつ、・・・」

文乃 「さっそく、ひとつめの『すまいる』ができたんやねー」

音々 「なな、いまの『すまいる』、すごいよかったで」

珠輝 「クチベタなワシによさそうな『すまいる』じゃのう」

美優 「こんどくくやってみるわくく」

部長 「おげ!

ほんじゃま、おとねえちゃん、花菜クンのこと、あとはおねがいのだ。

そゆことで、ていきってーじーなのだ」

花菜 「びゅいーんと音をたてながら、はしりさるブチヨーくん」

美優 「おかんくホケンしつにかえるわくく」

花菜 「いまはジュギョウじかん・・・のはずなんだけど、センセイがこない・・・。
おとねえちゃん、ふみのんちゃん、わたし、の3にんでキョウシツにいます」

笑魅 「とつげきつ、えみちゃんくいーずっ！ーずっ！ー！」

音々 「なんなんやら、いったい。やぶからぼおに」

花菜 「えみちゃんが、キョウシツにはいつてきて、すぐにきいてきた」

文乃 「どしたんー？」

笑魅 「えみもすきでっ、いまいちばんにんきのヒーローはっ？」

音々 「しらない」

文乃 「しらない」

花菜 「しらない」

笑魅 「ぶぶーっ！じかんぎれーっ！」

音々 「しつもんから、まだ2びようくらいしか、たってへんがな」

笑魅 「こたえはっ、またらいしゅーっ！」

文乃 「えっ、らいしゅうもあんのー？」

笑魅 「つづいてだいにもんっ、えみのとくいなカモクはっ？」

音々 「らいしゅうに、つづくとちゃうんかい」

文乃 「ウチしつとるでー。かていかー」

笑魅 「ぶぶーっ、こたえはチョーリジツシューー！」

音々 「そこは、かていかで、せいかいでええがな」

笑魅 「みんなっ、えみのことっ、わかってなさすぎっ」

音々 「そやけど、ふみのん、さつきせいはいしとったきがするで」

文乃 「そやね、ウチもさつきのは、せいかいでかまへんきがする」

笑魅 「こんどはっ、ミスメガネがっなにかっ、もんだいだしてっ」

文乃 「ウチかー。そやなー。ウチがこのメガネをどこのおみせでかったか、こたえてー」

笑魅 「んなもんっ、わかるかっ」

音々 「それをわかるのは、かなりきついで」

花菜 「ううん・・・」

笑魅 「えみのことっ、もつとくわしくなれっ。あとミスメガネのこともっ」

音々 「むちやいうとるなあ」

文乃 「もつと、おたがいをわかりあえるとえーなー」

音々 「そやなあ、まあ、メガネをどこでかったかは、わかるはずないやろおけどもなあ」

文乃 「あははははー」

笑魅 「わかるかっ、んなもんっ」

花菜 「わたし、えみちゃんのこと、そういえばあんまりくわしくない・・・」

笑魅 「えっ、そうなのっトガキっ。

んじゃっ、トガキやほかのひとにっ、えみのことをもっとわかってもらうのっ、
どうすればいいかなっ？なんかつかんがえてっ」

音々 「うん、なんかかんがえてほしいわあ」

文乃 「ななちゃん、なんかかんがえてー」

花菜 「うーん、いままでのなしのながれでなにか、かんがえてみるね。

そうだね・・・みんなで・・・けんてい・・・を試みるといいかな・・・」
音々 「けんていで、なん？」

文乃 「みんなでかー、どんなかなーどきどきー」

なかまのけんてい ↓ みんなのこのくわしさをこたえあいわかりあう

笑魅 「けんていってっなんなのっ？」

文乃 「なにかについて、どれくらいくわしいかをしけんてしらべて、

くわしいひとには、くわしいっていうシヨウメイをするっていうのやんね」

音々 「しけんをうけて、シカクをもらえたりもするらしいなあ。

みゅーのやりたいしごとの、カンゴシさんなんかも、けんていとはちゃうけど、
しけんをうけてシカクをとらなあかんらしいで。

んで、みゅーはカンゴ学校にゆうがくするために、

べんきょうをがんばっとるんやって」

文乃 「みゅーちゃん、がんばりややもんねー」

花菜 「と、いうわけで、カンゴシさんになりたいとおもってがんばってる、

みゅーちゃんをよんできました」

美優 「みんな~~~~、いや~~~~はあ~~~~」

音々 「いやは」

文乃 「いやっはー」

笑魅 「デカイヒトをよんでくんなっ、ぶんぶんっ」

文乃 「まーそーいわずー」

花菜 「このすまいるは、けんていというより、もんだいのだしあいをすることで、
おたがいにくわしくなれるような、そういうすまいるだとおもっ・・・」

音々 「んで、なな、そのみんなでもんだいをだしあうようなけんていをするこどと、

えみや、ほかのひとのことにくわしくなれることが、いまひとつつながらへんのやけど、どういうふうにつながるん？」

花菜「そのことをしてもらうために、↓ こんないいところ ↑ をまずいっね。まず、けんていをしてもらったひとが、たかさんのじぶんのことをしてもらえて、うれしくなるとおもうんだ。

たかさんじぶんについてのもんだいにせいかいしてもらうことで、じぶんのことをすぐくしてもらえてるとおもえるし、ふせいかいでも、こたえをきいてもらったあと、しつてもらえてなかったことをもつとんでもらえるんだ。

えみちゃんのさっきのチヨウリジツシユウがとくいということも、こたえをきくことで、よりくわしくなれたとおもうよ」

音々「そやなあ、ボク、えみがチヨウリジツシユウがとくいっていうのはじめてきいたんやったわ。そのことでくわしくなれたなあ」

美優「へ〜〜そ〜〜なんや〜〜。おかんも〜〜はつみをやったで〜〜。えみちゃんのこと〜〜〜〜、すこしくわしくなれたわ〜〜〜」

笑魅「ミスメガネがっ、えみのことしつてくれてっ、ちよつとうれしかったよ。それにほかのひとにっ、えみのことを、もつとんでもらえてうれしかった」

文乃「そういう、けんていでただしこたえをきくことで、くわしくなるっていうのにやくにたつんやー」

花菜「うん、そう・・・」

音々「なるほどなあ」

花菜「じぶんが好きなこと、くわしいことをほかのひとにんでもらえるっていうよさもあるし、それと、せいかいしたことのてんすうをくらべあうことで、ちよつとした楽しみにもなるよ。

えみちゃんがきいてた、いまにんきのヒーローのことも、ヒーローが好きなひとどうしで、くわしさをくらべあうとか、しらないところをおしえあえば、もつとおたがいくわしくなれてうれしいんじゃないかな。

それとどつちがくわしいかのきょうそうのたのしさもたのしめるよ」

音々「ふみのんとタヌキでラクゴのけんていをするとなのしそうやね」

文乃「ほんまやねー」

美優「けんていをすること〜、おたがいを〜、とか〜、

じぶんたちのくわしい好きなことを〜〜〜ふかくしりあうんやね〜〜」

文乃「そっかー、そういういいところなんやー」

笑魅 「なるほどっ」

美優 「ひつようなものって〜、どんなもんがあるん〜？」

花菜 「↓ こんないるもの ↑ は、もんだいとこたえをかく、かみくだよ。

もんだいは、もんだいをだすひとがだしたもんだいを、こたえるひとがかみにかいて、こたえは、かみのあいたところにかくといいよ。

ことばでもんだいをいつてもいいかな。いろいろくふうしてほしい・・・」

音々 「りよおかい。もんだいは、くちでいつてもええんやね。

ほかにもいろいろかんがえてみるわ」

花菜 「↓ こんなやりかた ↑ は、

けんていのもんだいを、こたえるひとのそれぞれのかみにかいて、

もんだいをといて、あとでこたえあわせするんだ。

てんすうはつけてもつけなくてもいいし、

てんすうのくらべあいも、してもしなくてもいいよ」

笑魅 「カントンだねっ」

音々 「わかりあうことがだいじで、

てんすうをくらべあうのは、したいひとだけでってことなん？」

花菜 「そうだよ。くらべあうとか、きそいあうとか、

そういうたのしみかたをするというのは、したいひとがすればよくて、

ぜったいしなきゃいけないこととはちがうとおもうんだ。

えと、それと、てんすうのよかったひとに、けんていにごうかくしたっていう

シヨウメイシヨをつくって、それをあげてもいいかな」

文乃 「シヨウメイシヨかー、どんなんあげるとええかなー？」

花菜 「てづくりのでもいいし、ほんかくてきなのもいいし、なんでもいいよ。

もらったひとがよるこぶものなら、どんなのもいいとおもっ。

これも、ぜったいによいにして、あげないといけないものとはちがうかな

音々 「もらったひとがよるこぶっていうのがミソやね」

美優 「ちいさいこ〜〜なんか〜、もらうとよるこぶやる〜〜な〜〜」

美優 「ほんじゃ〜、やりかたがわかったことやし〜、

みんなでやってみよ〜か〜」

笑魅 「はやくやりたいっ。とりあえずはやくやりたいしっ、

あたまかずあわせのためだけにっ、バカをよんできたっ」

部長 「いやぁーはっはっはっは。はるーなのだ、おとねえちゃん、みなさん」
笑魅 「やっほーっ、バカっ」

美優 「いや〜〜は〜〜、ブチヨ〜〜〜〜くん〜〜」

部長 「いやぁー、たいようのひざしのような、

おとねえちゃんからのしせんがまぶしいー！」

音々 「へー」

美優 「あれ〜？タヌキくん〜〜きてないね〜、どしたの〜？」

部長 「いま、アジでふとっばらってて、これないとのことなのだよ、みゅーちゃん」

笑魅 「アジグセわるいなっ。

まっ、かずさえそろえればどっちでもいいんだけどねっ」

音々 「まず、もんだいをだすひとをきめよっか」

部長 「ワタクシがやらせていただくのだ」

笑魅 「いいよっ」

美優 「おかんも〜、え〜〜で〜〜」

部長 「みなものしゅ、おげ？」

一同 「おげー！」

部長 「ほんじゃま。わが蒼遥楽校についてのけんてい、蒼遥けんていをするのだ」

笑魅 「らじゃっ」

美優 「いえ〜〜〜」

部長 「もんだいをワタクシがいうので、こたえをくちでいってほしいのだ。

それと、てんすうをつけないということ、すすめさせていただくのだ。

ではさっそくに。だいーもん、せーと会しつと、そのまわりにしかけられてる、

ワナのかずがだいたいどれくらいなのでしょう？3つからえらんでちよなのだ。

一、「10」。

二、「50」。

三、「100」。

さて、どれなのだ？」

音々 「おおめにみつもって、にばんの50」くらいやるかなあ」

文乃 「ウチ、いちやおもうわー」

花菜 「わたし・・・いちかな。

それと、なんで、せーと会しつにワナが・・・？」

笑魅 「100」！ぜったい100」！」

美優 「おかん、なん」かのこたえしってるし〜、こたえをいうのをやめとくわ〜」

音々 「なんでこたえをしってるんやるかなあ」

部長 「みなさんのこたえがでそろったのでこたえをば。

こたえは、さんばんの100コなのだ！」

音々 「おおいっ」

笑魅 「えみっ、せいかいっ。おもいっきりカンだけどっ」

美優 「それいじょ〜、せ〜と会よさんでワナをふやすたびに〜〜〜、

おかんのもちのメリケンサックが〜〜〜、

ひとつずつ〜、ちぬられていくで〜〜〜?」

部長 「によよ!?!これいじょうちぬりがふえていくのはこまるのねっ!

ででで、ではではでは、きをとりなおしてつぎのもんだい!

すこしまえの楽校びじんこんてすとで、だれがぐらんぷりだったか?なのだ」

花菜 「そして、それから、なんもんかこたえたあと・・・」

部長 「つぎが蒼遙けんていのさいごのもんだいなのだ。いま楽校ではやってる、

女子せーとの、ふぁっそんをみんなはなんてよんでるのだ?」

花菜 「女子のファッション・・・」

音々 「てんすうのかせげるもんだいやなあ」

文乃 「だれでもしつとるやるーな」

笑魅 「ラクシヨ〜すぎ!」

花菜 「・・・しらない・・・」

笑魅 「トガキはテンコウセイだよっ、きにすんなっ」

部長 「このもんだいのこたえをしることで、

わがここのことをもつとくわしくなってもらいたいのだ」

文乃 「さすがブチヨ〜くん、よくかんがえてるね」

音々 「きょうはヤリがふるかもな」

美優 「おかんもしらん〜わすれた〜」

文乃 「みゅーちゃん、しらんのかいっ」

音々 「みゅーのてんねんでんせつが、またひとつ」

文乃 「さいほう部にふくをもらいにいくとき、どーゆーてたんやるー」

音々 「で、ボクが、ななにこたえをおしえてええ?」

部長 「もちろんオゲ!」

音々 「もてもてもでるっていうねんで。ななが、いまきてるのもそつやねん。

ちよっとした、いろちがいのふくをまぜてきるのが、はやっとなねんで」

部長 「おとねえちゃん、れくちゅあをば、てんきゅー！」

花菜 「そうなんだね、しらなかった……。おしえてくれてありがとう。うれしいな」

花菜 「つぎは、おとねえちゃんがおとねえけんていをしてくれます」

音々 「じぶんのことをけんていにすんの、はずかしいような、たのしみなような」

部長 「ワタクシからの、らづがますますふかまりそうな、そんなけんていなのだ」

笑魅 「そのらづつ、はきけがするっ」

部長 「どんまい」

美優 「なにがどんまゝいなんやるゝゝゝ」

音々 「おとねえけんていはてんすうせいなんやで。

んで、こたえをかくかみに、もんだいがすでにかかれてるねん。

あとでこたえあわせをして、せいせきのええひとには、

ううん、なにかいいことあるかもなあ

部長 「このワタクシに、ぜひおまかせあれっ」

美優 「なにがおまかせあれゝゝなんやるゝゝゝ」

音々 「そいじゃ、おとねえけんていはじめ」

花菜 「カリカリカリとこたえをかくみんな……。わたしもかこう……」

花菜 「しばらくして……」

音々 「みんな、かけた？」

笑魅 「がふっー！」

部長 「ばっちー！」

美優 「もちろんゝゝやでゝゝゝ」

花菜 「わからないもんだい、けっこうおおかった……」

部長 「どんまい、花菜クン」

音々 「こたえをこくばんにかいてくわ。ちよっとまってや」

花菜 「こたえをみやすいところにかいていくおとねえちゃん」

音々 「はっぴょうします。まえのこくばんみたってや。

問・よくまちがえられる、なまえのよみかたなあに？

答・『ねね』『とか』『おとね』。

おとねって、ただしくとよんでくれるひとはけっこうすくない。

んで、このもんだいのほあいほ、みぎのどっちでもせいはいです。

問・音々のむかしのあだなは？

答・『雷神』。しってるひと、すくなそう。いまは、おとねえか、ガリベン。

問・しているぶかつ

答・いまのどこ、『へん』。べんきようがすきかな。

まえは、ふうきいいんぶんいいんちようだったんです。

問・せのたかさはどれくらいやる？

答・『150センチとちゅうくらんくらん』。べんまかくはナイシヨ。

まだちゃんとのびてる。もうすこしのびたい。

問・すきなたべものはなんでしようか？

答・『魚肉団子』。めっちゃすき。つみれともいう。

問・メガネかけてないときにほんとうは目がよくて、

じつはダテメダネをかけてる？このもんだいは、○Xでこたえてね。

答・『X』。ホントに目がわるい。ダテメガネのひと、けっこう楽校におおそう。

て、とこかな。みんなどやった？

笑魅「さっぱりわからなかったっ、もんだいようしにカンジがおおくてっ！」

文乃「そーゆーりゆうかいっ」

部長「どんまいーい」

美優「それでさつきくくく、がふってゆくてたんやねくくくく」

音々「それはあやまらんとなあ。ごめんな、えみ」

笑魅「ガリベンっ、どんまいーいっ」

文乃「って、まねかいっ」

部長「りぴーたふたーみー」

音々「なんだかここ、へんなくうきになってる」

笑魅「おげっ」

美優「おくげくく」

花菜「ほんとにへんなくうきに」

音々「さつきもいうたけども、みんな、なんもんわかったん？」

笑魅「さっぱりっ」

美優「はんぶんくらいわからなかったんやけどくくく、こたえをおしえてもらえてくく、

おとねえちゃんのこと〜〜〜、よくわかったで〜〜」

音々 「ほんまに？うれしいわあ」

花菜 「わたし、わからないことがおおかった・・・でも、

おとねえちゃんのことかもつとわかって、うれしかった」

音々 「そっかあ。そやけど、わかってもらえて、ボクもうれしいねんで」

笑魅 「ミスメガネっ、どうだったっ」

文乃 「えへへー、せのたかさいがい、ぜんぶわかったわー」

花菜 「すごい」

美優 「ほんま〜」

笑魅 「かっこいいっ」

音々 「さすが、いちばんながいこと、ボクとのともだち、

しんゆうでいてくれるだけあるわあ」

文乃 「えへ。そやねー、さすが・・・やね」

笑魅 「ぐずっ。あついユウジヨウのいいはなしだねっ。なみだがでるっ」

花菜 「ところでブチヨーくんは、なんてんだったの？」

部長 「ワタクシ、まんでんだったのだ」

一同 「って、それどうやってしらべたんだ！？」

なかまのけんてい ↓ みんなのことのくわしさをこたえあいわかりあう ↓ おしまい

花菜「そして、べつのひ」

音々「ボクらの楽校は幼小中高大のすべての学校をかかえてて、
ようちえんや大学院もちかくにあるんやで」

花菜「そうなんだ・・・」

文乃「ウチらの楽校のちかくに大学院生なんかがおるねんで」

花菜「へえ、そうなんだね・・・えみちちゃんて、小学生なの？」

笑魅「グサっ」

花菜「ぐさっ？」

音々「それはいいなさんなって」

花菜「え・・・ちがうの？」

笑魅「しつれいなっ、トガキとトシはかわらないよっ、

この○○○○っ！□□□っ！△△△△っ！」

花菜「そうなんだ・・・」。

諸般の事情により○と□と△で伏せさせて頂きました」

文乃「ななちゃん、あやまったほうがえーで」

花菜「????」

音々「ななの、なおしていかなあかんとこやなあ」

花菜「そして、べつのひ」

笑魅「やっほーっ。マジマジマジメっ、ジミジミジミキャラ3にんむすめっ。

みじかくいうとっ、マジミっ」

音々「まあ、そやねんけどなあ」

文乃「でも、そのとおりやねー」

花菜「がっくり・・・」

花菜「そして、べつのひ」

音々「えみ、がいこくそだちでエイゴがすこし、はなせるねんで」

花菜「すごい。きかせてほしいな」

笑魅「いいよっ。あいきやすぴーきんにんぐりっ」

花菜「わあ、すごい！いみがよくわからない・・・けど、

はつおんバッチリ！・・・なきがする。なんとなく」

文乃「すごいなー、ウチのカタカナエイゴとぜんぜんちゃうわー」

音々 「それにしても、この楽校にはほんまにろくな男がおらんあ」

笑魅 「サスガリユウセイみたいなっ、ほんとうのっ、

おとこのなかのおとこがいたらいいのになっ」

花菜 「サスガリユウセイ・・・？」

音々 「えみのみてるヒーローばんぐみのヒーローのことやで。

カンジでかくと、こう。流星流石ってかくねん」

笑魅 「バカやウラバンよりっ、ヒヤクオクマンチョーバイかっこいいっ」

音々 「そのすうじのいいかた、おかしいで、えみ」

花菜 「男のなかの男ってかんじかた、ちよっとずれてるような・・・」

文乃 「ブチョーくん、ドキドキ」

花菜 「そして、べつのひ」

笑魅 「ねーねーっ、なんでえみってこんなにあたまわるいのっ？」

花菜 「う、それは・・・うん・・・。そういうことをきかれると・・・」

音々 「イデンかな。おやごさんはどんなおしごとしてはるん？」

笑魅 「おとーさんもおかーさんも、おじーさんもおばーさんも、

そのまえからも、かぞくみんなですっどホーリツカンケーとかいうしごとだよっ」

花菜 「ホーリツカンケー・・・？」

笑魅 「ロースクールとかいうカイシャのミンポーガクキョージユとかいうしごととかっ、

あとコートーサイバンシヨとかいうカイシャのサイバンカンとかいうしごととかっ、

あとホーリツジムシヨとかいうカイシャのベンゴシとかいうしごととかっ、

そういうホーリツカンケーとかいうしごとらしいよっ」

一同 「ス・・・スーパーエリートのおすじかーーーーー！！」

それなら、なんでこんなごどもができたんだ・・・？」

花菜 「そして、べつのひ」

笑魅 「はやいとこっ、セイトカイチヨウのバカがジシヨクしてくんないかなっ

そうすればっ、えみがセイトカイチヨウになれるのになっ。

もちろんっヒマつぶしのためにっ」

音々 「イス、ねらっつたんかい。あと、しよせんひまつぶしのためかい」

花菜「そして、べつのひ」

花菜「いま楽校ではやってる、ダテメガネをかけようとおもってるんだけど、どうかな？」
音々「そうなんや、みんなとおなじになって、ええとおもうで」

美優「ななちゃ〜ん〜ん。かわい〜のがおいてるおみせ〜、
こんどおかんといっしょにいこや〜」

花菜「うん、わたしでよければ・・・。えみちゃんは、どうしてメガネかけないの？」

笑魅「えみっ、エンシのせいでちかくのものがみえないんだよ。」

それにっ、エンシよのメガネかけても、ちかくのがちゃんとみえないんだよ、
マンガのほかのホンをよまないのもっ、それでっ」

花菜「みんな、しーん・・・としずまりかえる・・・。」

えみちゃん、ゴメン・・・。

おかしなことをきいて、ほんとうにゴメンなさい・・・」

笑魅「セイトカイチヨウのバカのいいかたをまねしてゆうとっ、

トガキっ！おげっ！どんまいっ！だよっ。

えみっ、きにしてないからっ、トガキもきにすんなっ」

花菜「えみちゃん、ちゃんと本をよめてれば、かしこかったのかも・・・」

花菜「いまはじゅぎょうのあいだのやすみじかん。じゅぎょうにでてるのは、

おとねえちゃん、ふみのんちゃん、わたしたちの3にんくらい・・・」

文乃「ななちゃん、かいせつありがとうー」

音々「ありがとうおな、なな。あと、ふみのん、はい、かいてきたで」

文乃「ありがと、おとねえ。あしたまたかえすわー」

花菜「なにをわたしてるの・・・？」

音々「日記の本。ボクとふみのんのふたりで、こうかん日記してるんやで」

花菜「へえ、いいな」

文乃「ななちゃん、ウチとこうかん日記せーへんかー？」

音々「ボクとも、しよやあ」

花菜「うん、しよ・・・」

文乃「日記がたくさんにふえることになるねー」

音々「日記を3人でバラバラにすんの、けっこうたいへんやるおなあ」

花菜「たくさんひとと、いっしょにたのしめるような日記がほしくなる・・・」

文乃「そやねー、たくさんひとと、なかよくこうかん日記できるとええやるなー」

音々「なな、みんなでできるような、そういうすまいるかんがえてくれへんか？」

花菜「そうだね・・・、うーん。いま、かんがえたんだけど・・・、

みんなでこうかん日記をするといいかな・・・」

文乃「なにににー、きかせてー」

音々「どんななんかな、どんなすまいるなことが、たのしみやわあ」

みんなでのにつき ↓ 日記のへんじをみんなでかきあいたのしくなる

文乃「で、どんなすまいるんー？」

花菜「 ↓ こんなすまいる ↑ っていうのをまず、いうね。

どんなのかっていうと・・・、

いつもはひとりでかく日記や、ふたりでするこうかん日記を、

もっとたくさんみんなでかきあうと楽しいかなっておもうんだ。

それと、日記としてつかうだけとちがって、

日記にかいたことばにたいしてのへんじを、みんなでかきあうっていう、

こうりゅうのための本としてのつかいかたもできるっていうすまいるなんだ。

それと、ほかのつかいかたで、つたえたいことをしってもらうための、

れんらくするための本としてもつかうと楽しくて、
やくにたつとおもうんだけど、どうかな・・・」

文乃「たくさんで日記をこうかんするなら、ななちゃんもウチらといっしょできて、
すこいええとおもうでー。ほかのひともいっしょにやってええん？」

花菜「うん、なんにんでもいいよ。えみちゃん、みゅーちゃんも、
いっしょにすると楽しいとおもう。もっとたくさんでも楽しいかも」

文乃「日記にかいたことを、こうりゅうのためにみんなでへんじするっていうのが、
いままでの日記とちゃうかんじやねー」

音々「つたえたいことをしてもらうための、れんらくするための本、
っていうんは、どんななん？」

花菜「日記としてのほかに、つたえたいことをつたえるために
本にいろいろできごとをかくと楽しいし、ペンリだとおもって・・・。

きょうしつにおいてある、がっきゅう日誌みたいなものかな。」

音々「そっかあ、れんらくちょうや、カベにかけてあるれんらくばんにちかい、
そういうのに、よくにたつかいかたやね」

花菜「うん、そんなかんじだよ。日記というよりは、でんごんばんにちかいかな。

めだつところに日記の本をおいておいて、みんながしておいたほうがいいことを、
みんながかきたいときかいて、みんなでそれを見て、
しっておいたほうがいいことをしっておくことができるっていうものなんだ」

花菜「↓ こんないいところ ↑ のことなんだけど・・・。

このすまいるのいちばんいいところは、つたえたいことやヒミツなんかを、
みんなでいっしょにもちあうことで、いっしょに日記をかいてるみんなが
みんなは、なかまだというきもちをつよくできるところかなっておもうんだ。
いっしょにかいてるひとたちのみんなからのへんじをもらえるっていう、
たくさんからこたえがかえってきつてうれしいというよさもあるんだ。

それと、かきおわった本をのこしておいて、何年かたってからよみかえすことでの、
おもいでがたくさんつまった、日記のたからものとしてのよさっていう、
そういうよさがうまれるのもいいところかなっておもう。

それと、日記に、絵をかくとか・・・シャシンをはりつけてもいいとおもうよ。

笑魅「そのはなしっ、ききずてならんっ」

音々「えみ、きいとつたんか」

文乃「つて、なんでとうじょうしかたがジダイゲキっぽいねんっ」

笑魅「なんだかたのしそっつ、えみもまぜてっ」

文乃「えみちゃんもいっしょにしょー。たくさんのひとで日記をこうかんするなんて、にぎやかで楽しそうやねー」

音々「絵やシャシンをはりつけると、ふつうの日記のわくをこえられて、楽しいやろなあ。つたえたいこと、ヒミツをもちあうって楽しさは、

こうかん日記っぽくて、どういう楽しみかだいたいそうぞうがつくわ」

笑魅「えみっ、こうかんニッキっ、したことないっ。どんなたのしさなのっ？」

花菜「ナイシヨばなしみたいなものかな。

なかよしどうしの、みんなのなかだけのはなしっていう、

なかよしどうしの、なかよしなきもちをかんじられるとおもっ」

笑魅「それならっ、なんとなくわかるっ」

音々「たくさんのへんじがかえってくるっていうのがええなあ。

文乃「いっしょうのおもいで、たからものになるやんねー」

花菜「↓ こんないるもの ↑ は、ええと、それと・・・。」

つかうものは日記をかく本だけだよ。

文乃「それなら、やりやすいやねー」
おうちでも学校でも、なかよしがいるところなら、楽しめるかなっておもっんだ」

花菜「いっしょに楽しむひとにんずうは・・・5、6にんくらいまでかな。

ふつうのこうかん日記とおなじように、ふたりくらいでも楽しい・・・」

音々「ふたりよりたくさんなら、そこそおおいかずまで、いっしょにできるんやね」

笑魅「フツのこうかんニッキよりっ、たくさんのひとでたのしめるねっ」

音々「日記につかう本は、さっきまで、ふみのんとボクがつこた日記の本でええん？」

花菜「うん、かける本ならなんでもいいよ。ふたりが、かいてたつづきからかいてもいいよ」

花菜「↓ こんなりかた ↑ っていうのをいうね。」

いっしょに楽しむみんなで、こうかんしあいながら本にいろいろかいていくんだ。

ここはふつうのこうかん日記とおなじだとおもっ。

えっと・・・それで、かいたあとに、つぎのひとにわたすまでのじかんは、

ながくてもみじかくてもよくて、

かいてすぐでも、かいた1時間あとでも、つぎの日でも1週間あとでもいいし、

つぎのひとが、まわしてっていうまえならいつでもいいとおもっ」

笑魅「えみみたくないかげんなひとでもっ、たのしめるねっ」

音々「じぶんでいいかげんっていうか」

花菜「それと ↓ だいじなところ ↑ で、ただ日記やつたえたいことをかくだけでなく、ほかのひとがかいたことへの、

へんじやツッコミや、ちゃちゃいれもかくのが楽しいよ。
そうすることで、たさんのひとで日記をかくことの楽しさが、
もっと、かけざんみたいに、たさんに、ふえていくかなっておもってるんだ。

ここが、みんなで楽しむことのいちばんのいいところなんだ。
こうすることで、みんなでいっしょにいるかんじが楽しめるとおもう。

もじだけとちがって、きょうしたことや、かんじたことをわかりやすくするための、
絵やシャシンをはってもいいし・・・それと、らくがきしても楽しいとおもうよ」

音々「ツッコミかあ。ふみのんではんやねえ」

文乃「えへえへー。そーゆーおとねえこそー」

笑魅「やつほーっ、ツッコミジミキヤラふたりぐみっ」

音々「またへんなあだなが、うまれとるなあ」

花菜「つつこまれると、うれしいよね。」

それと、じぶんがかいたことに、3にんとか4にんからの、

たくさんのへんじやかんそうがかえってくると、すごくうれしいんじゃないかな」

文乃「かえってくるへんじがおおいと、うれしーやんねー」

音々「ボクがいつもやってるこうかん日記で、ふみのんからへんじがかえってきて

すごくうれしいなっておもうわあ。それがたくさんからやねんから、

もつとうれしいやるなあ」

花菜「うん、そうだとおもう・・・。えと、それで、こうかんしてかくだけとちがって、
本をつくえのうえにおきっぱなしにするとか、こう、本をカベにヒモでつるして、
みんながかきたいときにかきたいことをかくというところにも楽しいよ。

そのときはいっしょに日記をかいてるひととちがうひともみることができるといいう、
そういうことをかんがえてかくといいとおもうよ。

このおきっぱなしにするっていうの楽しみかたは、

さっき、おとねえちゃんもいってた、日記というより、

がっきゅう日誌や、れんらくちようや、れんらくばんにちかい楽しさかな。

それから・・・ふつうの日記のようにいさいきんのことをかくだけとちがって、

だいぶまえにしたことやかんじたことをかいても楽しい・・・」

音々「きのうときょうだけとちごて、むかしにさかのぼって、むかしのことをかくんかあ。

いまだけのことをかくより、ひるがりができそうやね」

文乃「おきっぱなしにするのは、ふーきーん会のへやに本をおいておいて、

みんなでかいてまわしよみして、つたえたいことをおたがいにわかりあう

っていうのに、つかえそー。ひつようなことだけとちごて、それといっしょに、楽しいことやジョーダンもたがいに、かきあうこともできそーやねー」

花菜「うん。ひつようなこととちがうこともかくのも楽しいかな」

笑魅「おいておくのはっ、どこにおいておくといいのっ?」

音々「いま、きょうしつにいることやし、きょうしつのどこにおくかやなあ。

カベにつりさげておくとか、きょうしつのすみっここにおいとくとよさそーやね」

文乃「おいておくすまいると、こうかんするすまいるって、

日記にかくことはどっちも、だいたいおなじなんやんねー?」

花菜「おいておくのは、たくさんのひとがみることになるし、

それにふさわしいことをかくといいとおもうよ。

ナイシヨのはなしはしないほうがいいかな。でも、たくさんのひとにかいてもらえて、そのことでのたのしさがたくさんあるとおもうよ。

手でわたしてこうかんする日記は、じぶんたちだけの日記になるから、

みんなでヒミツとかナイシヨのこととか、こっそりつたえたいことなんかをかくといいかな。ほかにもいるいるかんがえてみてほしい・・・」

笑魅「こうかんするニッキとっ、おいとくニッキかっ。どっちもちがうんだっ」

花菜「うん・・・」

音々「ほなそーいうことで」

笑魅「さっそくやろっ。えみからかかせてっ」

音々「ほい」

花菜「えみちゃんに日記の本をわたす、おとねえちゃん」

笑魅「えみっ、ジがきたないけどっ、ゆるしてなっ」

部長「どんまい」

花菜「わっ、びっくりしたっ。いきなりあらわれたブチョーくん」

部長「いやぁーはっはっはっはっは。ワタクシも、さんかをばさせていただくのだ」

珠輝「いやっはあ。ワシもよろしいですかな?」

花菜「タヌキくんもやってきた」

音々「ずいぶんつごうよくできてきたな。まあ、これで6にんになったわ」

笑魅「じゃっ、かいてくっ。

『きょうたべたタ」ヤキに、たこがはいってなくて

せいとかいちよおのばかにやつあたりした』

・・・とっ。これでいいっ?」

珠輝「フデでへんじをかかせていただきますわい。

『おもいきりやつあたりじゃのお。ブチヨーもさいなんじゃな。』

・・・ふむ、われながらタツピツ」

文乃「タヌキくん、フデがうまいんやねー」

音々「やるなあ」

珠輝「ふおっふおっふお、かくれたとくぎじゃわい」

部長「それでは、ワタクシも、おとねえちゃんの、おうつくしいにおえをば、かきかき。それと、タコヤキにタコのかわりにはいつていたコンニャクだけを、ワタクシが、やつあたりでたべさせられたときのシャシンをはっておくのだ、ペたペた」

花菜「『ブチヨーくん、そのシャシン、

どうやつてとったのか、あとでおしえてください』」

音々「ボクもへんじをかくわ。」

文乃「『メロンパンにメロンがはいってなかったときも、ぜひやつあたりしてね。』」
「へんじにたいしてのツツ」ミかいていい？」

『って、メロンパンにはフツ、メロンは、はいつとらんがなっ。』

笑魅「あはははははっ！たしかにメロンはフツはいつてないねっ、メロンパンっ。

『トガキつ、たのしいすまいるだねっ』

花菜「よかった、楽しんででもらえて・・・」

音々「『なな、ほかになんかかいてや

花菜「そうかな。じゃ・・・。』」

『きよう、すまいるをみんなに楽しんででもらえてうれしかった。

またなにかおもいついたとき、それをみんなで楽しんででもらいたいです。』」

笑魅「『うわ、とがきつて、まじめ。』」

珠輝「『そういうとこが、ななちゃんの、めんこいとこじゃとおもいますわい。』」

文乃「『そやね、タヌキくんというところだよ』」

若草「『ほんまにウチらがなかよちゃっていうきもちになれたわ。

なな、いいすまいるをありがとうっな。』」

部長「いまはみんなであつまってかいているのだ。

でも、楽校のジュギョウのあいまのやすみじかんごとに、

ひとりずつまわしていても、きっと、いまみたいに楽しい日記になるのだ。

一日にーかい、日記をかくためにあつまるとか、

一日にひとりずつかいていって、ゆっくりまわすのでも、楽しくなるのだ」

音々「ボクとふみのんで、いままで日記をこうかんしてたからわかるんやけど、

かきつくしたあとの日記の本って、たしかにだいじな、たからものやつておもうわ

珠輝「『そういえば、ワシも、まえに日記をひとりでかいておって、

そのかきおわった日記はいまでもだいじにしまっておるわい」

部長「日記の本はーさつだけしかのこせなくて、かきおえたあと、

そのーさつを、かいたひとたちぜんいんがもつことはできないかもしれないのだ。

でも、いつか同窓会するときもってきて、みんなで日記のことばやしやシンをみたり、ほかにも、卒業の日にだれかにそのだいじなーさつをあずけて、

そのひとりのひとにあとをたくすということは、

それにはとてもいみがあることだとおもうのだ」

笑魅「それじゃっ、バカがガリベンをラヴなことっ、ニッキにかいちゃおっかなっ」

部長「いやあーっはっはっは。そんなナイシヨのこといわれっちゃって、

もうてれちゃうなあーっはっはっは」

音々「へー」

珠輝「それ、バレバレじゃぞ」

みんなでのにつき ↓ 日記のへんじをみんなでかきあいたのしくなる ↓ おしまい

花菜 「そして、べつのひ」

笑魅 「デカイヒトはっ、キオクリヨクがわるすぎっ」

音々 「みゅーって、3ふんまえにおぼえたことをわすれるほど、

ジュートクな、てんねんなんやで」

美優 「へ〜〜そ〜〜なんや〜〜」

文乃 「たにんごとかいっ」

美優 「あははははは〜〜〜へ〜そ〜なんや〜」

音々 「いまいうたこと、みゅーに3じかんまえにもいうたで」

美優 「そやったっけ〜〜〜?」

音々 「みゅーのてんねんでんせつが、またひとつ」

花菜 「わすれそうだね、インスタントのたべものをつくってること・・・」

花菜 「そして、べつのひ」

音々 「みゅーな、ああみえて、ベンキょうのせいせきが、まんなかくらいやねんで」

花菜 「がんばりやなんだね・・・」

花菜 「そして、べつのひ」

音々 「みゅーってな、ホケンしつからあふれそうなくらい、

みゅーめあてで、ホケンしつに男子せーとがあつまってくるような、

そういうにんきのたかいコやねんで」

花菜 「すごいにんきだね」

文乃 「おんなのコのファンもおおくてうらやましーわー」

笑魅 「デカイヒトよりっ！ えみのほうがっ！ ぜったいにっ！ かわいいのにっ！

ぶんぶんっ！ ぶんぶんぶんぶんっ！ ぶんぶんぶんぶんぶんぶんっ！」

文乃 「みゅーちゃん、バレンタインに、ほんめいチョコをたくさんもらうんやってー」

花菜 「え・・・それ、どうしてっこと・・・?」

花菜「いまから、じゅぎょうで音楽しつにいくために、

マジミの3にんで楽校のなかをあるいています」

文乃「ななちゃん、かいせつありがとうやでー」

きょうはどんなじゅぎょうなんやるなー」

音々「フエでも、ふくんとちゃうかあ」

花菜「といいながら音楽しつにいくと・・・うつ、なに？このすごい音・・・」

音楽しつのなかにはいる、わたしたち。なかにタヌキくんたちがいます」

音々「いやは、タヌキ。みんなできあがったんのか？」

珠輝「いやっはあ、おとねえちゃん。そうじゃぞおい、モリのまっさいちゅうじゃ」

花菜「モリって・・・？」

音々「鯨盛のことやで。音楽しつで、どんちゃんさわぎしとったみたいやな」

花菜「?????・・・アジモリ・・・？」

珠輝「いやあ、ふとっばらった、ふとっばらった。

マジミ3人むすめのみんなも、鯨でもいっばい、いかがかの？」

文乃「このおはなしは、よいこもよむもんやから、うーん、鯨はちょっと・・・」

花菜「ふとっばらった・・・？」

音々「そのことばのいみはなあ、なながオトナになればわかるねんで」

花菜「ぜんぜんわからない・・・」

珠輝「ななちゃん、うぶなところかわいのお」

音々「タヌキ、そのへんにしとき。かなりこまってるで」

花菜「・・・」

珠輝「ふおっふおっふおっふおっふおっふお」

文乃「かなりできあがってるみたいやねー」

音々「モリにつきものなことやな、そのてのはなしは。

なな、ごめん、いまのはきかんかったことにしたってや」

珠輝「それで、いまからみんなで歌まつりでもせんかな？」

文乃「うーん、それが、きょうは、たいいくかんのほうで

歌まつりのどろぐをつかって、歌まつりができひんのやわ。ざんねんやんなー」

珠輝「そうかのほ。じゃんねんじゃわひい」

音々「タヌキ、したがまわつとらんで」

珠輝「ふおふおふお」

笑魅「トガキっ、なんかいいすまいるっ、ないっ？」

音々「えみ、おったんかいなあ」

笑魅「モリしてっけどっ、コーシーグーヌーばっかのんでたっ」

文乃「そやなー、ななちゃん、すまいるでいいの、あらへんかなー？」

どうぐはあらへんけど、ウチも歌いたいねんー」

花菜「そうだね・・・なら・・・ううん。」

みじかいうたかい・・・かな。うん、そういうのがいいかな・・・」

一同「・・・ドキドキ・・・」

みじかいうたかい ↓ みじかい歌を歌ってなかよしでもりあがる

珠輝「かたんにいうと、どんなすまいるなんかの？」

花菜「歌を歌うときに、みじかい歌を音楽をながさずに歌うっていう、

↓ こんなすまいる ↑ なんだ。

てがるでかたんんで、ちよっとしたひまつぶしにも、

じっくりみんなでたのしむものにもつかえるとおもう・・・」

音々「アカペラでってことやね」

笑魅「アカペラってっ？」

音々「ピアノとかギターとか、そういうのおんがくをかけへんで歌だけ歌うっていう、

そういう音楽の歌いかたのことやで」

笑魅「なるっ」

文乃「ななちゃんのいう、みじかいうたかいの、みじかい、のほうは、

どういういみなんー？」

花菜「歌をはじめからおわりまで歌うより、みじかく歌うほうがもっといいっていう、

そういうわけがあつて、みじかくうたうっていういみなんだ。

えと、どういうことかっという・・・。

アカペラでながいあいだ歌うのがたいへんっていうのが、ひとつのりゆうで、

そうならないためと・・・。それと、もうひとつのりゆうは、

アカペラで歌うときは、歌をサビのところだけとか、1ばんだけ歌うとか、

そっちのほうで歌いやすいっていう、

そういういいところがあるっていうのが、もうひとつのりゆうなんだ。

そういういいところがあつて、みじかく歌うほうがいいかなって・・・」

珠輝「みじかいほうが、スピーカーをつかわないときにはかえっていいんじゃないの」

花菜「・・・うん、そういうこと・・・」。

ほかに、みじかくすることで、いいことがほかにあるかな」

笑魅「そのっ、ほかにもあるいいところっ、おしえてほしいなっ」

花菜「うん、そうだね・・・。↓ こんないいところ ↑ は、まず、スピーカーなんかの、どうぐや、きかいがいらないうことだよ。そのおかげで、アカペラですむんだ。

あと、みじかくうたうことで、みんな楽しんでても、みじかいじかんでできるよ。それと、まわりのひとのめいわくにならないなら、

どこでもできるっていう、てがるなところもいいところなんだ。

ちよっと歌うだけだから、歌はうまくてもヘタでもいいとおもう。

歌いたい歌のサビなんかの、歌いたいところをすこししってるだけで

歌いたい歌を歌えるっていうのもいいところかな。

あとは・・・、歌がみじかいぶん、すぐにかわれて、かわりばんこで歌いやすいんだ。それで、いちばんいいところは、

みんなでいっしょにわいわいと楽しいじかんとすこせるっていうところかな

文乃「いろんなえーとこが、あんねんなー」

花菜「それと・・・、↓ こんないるもの ↑ は、しずかなところくらいかな

音々「ほかのひとのめいわくにならないとこ、ってことやね」

珠輝「どういうたのしみかたか、は、おしえてもらえるかのう?」

花菜「えと、↓ こんなりかた ↑ はっていうと・・・。」

歌いたい歌の歌いたいところだけを歌うといいよ。サビだけでもいいかな。

歌ってもひとのめいわくにならないところで歌うっていうのがだいじなんだ。

歌うのがはすかしいひとには、ほかのひとといっしょに歌ってもらって、

はすかしさをかるくしてあげるといいとおもうよ。

それとか・・・、くじびきであたったひとが歌うとか、

みんなでじゅんばんに歌うとかすれば、そのばにいる

いっしょに楽しんでるひとたちみんなでかわるがわる歌えるて楽しいとおもうよ。

つぎに歌いたいひとをきいて、その人に歌ってもらうというのもいいとおもう。

自分でそのばでかんがえたみじかい歌を歌うっていう・・・、

・・・ソッキョウっていうのかな。そういうのもみじかい歌だからできて、

そうやって楽しめるとおもうよ。

歌う歌のながさはみじかくても、あるていどながくても、

かなりながくても、ぜんぶ歌ってもいいかな。

歌のうまさのくらべあいをするとか、

みんなに、歌った歌のうまさをきいて、どっちがうまいかをきめるのもいいな。歌わずに・・・好きな歌のかしだけを、ことばではなしてもいいとおもうよ。詩をことばではなすような、そういうのをしてもいいとおもう。

すきな詩やハイクや、すきなことばを、そのばでメロディーをおもいついて、そのばでメロディーをつけて歌うのも楽しいんじゃないかなっておもってて、それもみじかいからできることなんだ。ハイクや詩はだいたいみじかかったはず。それと、↓ だいじなところ ↑ は、

みじかく歌うっていうことで、みじかく歌うあいだにきもちをつよくこめて歌えるっていうところだよ。そういうのがたのしいかなっておもった。

サビのほんのすこしのあいだとか、いちばん歌いたいところを、

ちからとコロコロをグツとこめて歌うと、みじかく歌うことだからできる、

きもちのこもった、楽しさがでてくるのとちがうかな・・・どうか・・・?

笑魅 「みじかくうたうことだからこそっ、みじかさすべてをこめるんだねっ。

あついつ、うたかいになりそうだなっ」

文乃 「と、いうわけでー。さっそくいこかー」

笑魅 「うたうぞっ、いえいつ」

花菜 「みんなで楽しもうということで、みゅーちゃんとブチョーくんをよんできました」

珠輝 「楽しむひとは、おおいほうがいいぞな」

美優 「いや~~~~~は~~~~。よんでくれてありがと~~~~な~~~~」

部長 「いやあーっはっはっはっはっはっ。めないへるぴゅー?」

笑魅 「めないなんとかってっ、バカがなにいつてるかっ、さっぱりわからないよっ。

まあっ、ガレキもイマのにぎわいつ」

花菜 「ガレキ・・・?」

音々 「えみもブチョーも、なにいうとんのか、おもいつきりわからへんで。

そんで、だれから歌うん?」

笑魅 「えみっ、えみからっ、もちろんえみからっ」

珠輝 「えみちゃん、ワシとデュエットせんかの?」

笑魅 「いいよっ、じゃっ、『流星戦記シューティングスターダストマン』の、

オープニングをうたおっかっ」

音々 「いきなりすごい歌を歌うんやなあ」

珠輝 「わかったわいな。サビを歌おうかの?」

笑魅 「うんっ」

みじかいうたかい ↓ みじかい歌を歌ってなかよしでもりあがる ↓ おしまい

花菜 「そして、べつのひ。

ブチヨもでるふおーがーるのスカート、すごくはずかしい・・・」

音々 「なら、はかんときいや、みんなといっしょのにしいひんの?」

花菜 「ブチヨーくんにせつかくもらったんだし・・・」

音々 「ギリがたいなあ」

文乃 「そのスカート、うらやましー」

花菜 「えっ」

音々 「マジでっ」

二人 「シヨーキかつ?!」

花菜 「そして、べつのひ」

笑魅 「ひまだなっ。セイギのヒーローでもあらわれてっ、

テレビのヒーロードラマみたいになっ、セイトカイチヨウのバカをっ、

ほうむってくれないかなっ。ヒマつぶしとしてっ」

珠輝 「ムチャいうとるのう」

文乃 「えみちゃん、それってー」

美優 「よんだ〜?」

音々 「そおか、みゅーにたのむって、てがあったわ」

文乃 「おとねえと、えみちゃん、みゅーちゃんに、戦・慄っ!」

花菜 「そして、べつのひ」

文乃 「ウチとおとねえでコンビをくめば、まちがいなく、うれる」

笑魅 「シヨーバイでもっすんのっ?」

花菜 「なんのこと・・・?」

音々 「ふみのんがボクをヨメにもらうんか?」

文乃 「てんねんのみゅーちゃんがくわわってのトリオでも、うれる」

花菜 「歌でも歌うの・・・?」

笑魅 「デカイヒトのっ、うたのへたさっ、しってるっ?」

音々 「どゆこっっちゃ?」

部長 「ウマはもちろん、キヨーギ用のばじつ部のしくごやから、つれてきたウマなのだ。
のることもできますので、よければ、ぜひなのだ」

音々 「ウマはともかく、ウマいがいの、ハチュールイ、リヨーセールイはなあ」

文乃 「もうすぐ、やすみじかんがおわるよ、そろそろかえるっか」

音々 「せやな、ほな、ボクらはきょうしつにかえるわ」

部長 「いやあーもつたいない、チンジューがまだまだこれからやってくるというのに！」

音々 「えんりよしとく」

文乃 「ちんじゅうはちよつと」

花菜 「ゲテモノ・・・?」

笑魅 「ネコいがいつ、いらんっ」

音々 「そゆことで、ほなかえるわあ」

花菜 「で、みんなできょうしつへと、かえっていつているところですよ」

文乃 「あとでウマにのりにいきたいわー」

笑魅 「ネコっ、めっっっっっっっっっっ、かわいかったっ」

花菜 「・・・うん」

音々 「せやね」

笑魅 「あとでまたっ、あいにいきたいっ」

文乃 「みんなでペットをみせあうようなー、そういうすまいるがあればいいねー」

音々 「うん、そやな。なな、なんか、かんがえてくれへんか、そういうすまいる」

笑魅 「ペットちゃんたちとちがってもっ、いいよっ」

花菜 「じゃあ・・・もちよって、あつまる・・・なんかいいかな・・・」

音々 「どんななんかなあ」

笑魅 「たのしみっ」

文乃 「もちよるんかー、どきどきー」

もちよりあつまり ↓ みんなであつまりもちよったものでたのしむ

音々 「どんなすまいるか、だいたいはさっしがつくねんけど、じっさいどんななんなん?」

花菜 「そうだね、いろいろなものをもってあつまって、

いっしょにみたりきいたりたべたりあそんだりする・・・っていう、

そういう ↓ こんなすまいる ↑ なんだよ

笑魅 「たべたりあそんだりもするのっ?」

花菜「うん。そのことはあとでいうね、もうちょっとまってね」

文乃「もちよるのは、ペットちゃんだけとちゃうんやねー」

花菜「うん・・・」

花菜「↓ こんないいところ ↑ は、みんなであつまってワイワイするたのしきかな。

それと、じぶんのもってない、ほかのひとのもってるものでたのしめるところも。

ほかのみんなのもっているすきなものをつかって、

じぶんがもっていなくてしらなかったものをたのしめて、

じぶんのしってるたのしいことのはばがひろがるんだ。

ほかの人のすきなことをしれるっていう、わかりあうよさもあるよ」

音々「ほかのひとの、しらなかったことをしるんやね」

文乃「じぶんのだのしさのはばがひろがるっていうの、えーねー」

笑魅「たくさんっ、いろんなものでたのしめるねっ」

笑魅「たべたりあそんだりするためにつ、

どんなものもちよるのかっ、そろそろおしえてっ」

花菜「いうのがおくれてごめん。 ↓ こんないるもの ↑ は・・・、

おかしやくだものなんかのたべものや、ふく、アクセサリー、あそびどうぐ、

おんがくのきけるもの、マンガ、おもいでのアシソン、ほかにもなんでもいいよ。

いっしょにいるひとがたのしいとおもえるものならなんでもいいかな。

笑魅「いろいろもちよるんだねっ」

花菜「うん、そうなんだ。ほかにも、いろいろかんがえてほしい・・・」

音々「さっきうんどうじょうでやってた、

おうちでかってるペットのもちよりなんかでもよさそうやね」

文乃「どんなたのしみかたか、おしえてもらっていいー？」

音々「うん、ボクもききたい」

花菜「↓ こんなりかた ↑ はっていうと、

いろいろなものを、もちよってあつまってたのしむんだ。

もちよったものをみんなでこうかんしたり、わけあったり、

いっしょにひとつのものだのしむっていうことをするんだ。

だれかのもってきたマンガをみせてもらってみんなだよむとか、

じっかからおくってきただものみんでたべるとか、

アクセサリーのこうかんとか、かしかりとか、

いっしょにだれかの好きな音楽をきくとか、
・・・ほかにもたくさん、かんがえられるよ。

おうちでかってる、ペットのワンちゃんとかネコちゃんをつれてきて、
みんなでかわいがるのもたのしいとおもうよ。

もちよったものをみんなでいっしょにたのしめるなら、

もちよるものはなんでもいいかなっておもうんだ・・・」

笑魅 「いろいろできるねっ」

音々 「くふうすることで、いろいろできるんやね」

文乃 「ウチ、いろいろやってみたいっておもうわー」

花菜 「というわけで、ひるやすみになってから、

みんなでいろいろもちよってあつまることにしました。

そして、みゅーちゃん、タヌキくん、ブチヨーくんをよんできました」

笑魅 「みんなっ、いろいろもってきたかっ」

珠輝 「いろいろと、のう」

部長 「いやぁー。。。ナベのざいりょうなんぞを、おもちしたのだ」

美優 「よさそくなんくもってきたでくく」

文乃 「ウチらもバッチリー」

部長 「ではさっそく、ヤミナベ会をもよおすとするのだ」

音々 「って、ヤミナベ会かいな」

花菜 「うん・・・それも楽しそう」

音々 「って、楽しいんかい」

美優 「ななちゃんがゆくなら楽しくかもく」

笑魅 「ナベにつ、コーシーマメっ、いれるよっ。ニガミばしってウマイっ」

珠輝 「フロムこたい、トウえきたいとなるざいりょうをいれるとは、しんかんかくじゃのお」

音々 「ドリッブしいひんのかい。マメそのままかいな。」

いや、ドリッブしても、きょうれつか」

部長 「ワタクシは、にこごりをつくるためのざいりょうをばいれさせていただくのだ。

127年はきふるした、せんぞだいたいだったわる

ねんだいもの力ワグツをいれておくのだ」

珠輝 「フロムこたいトウえきたいをまたしてもいれるとは、ブチヨーもやるのお」

音々 「って、カワグツかい。ボクはえんりよしとく」

文乃 「ウチもえんりよするわー」

美優 「おかんもく」

花菜「わたしも」

笑魅「えみもっ」

一同「えみちゃんはたべやっ、いろいろいれたやるっ！」

部長「とりあえず、もってきたざいりょうを、ぜんぶほつりこむこととするのだ」

文乃「ほなウチらだけで、おかしパーティーしよかー」

美優「しょくどうに〜、おかしもらいにいってくるね〜」

花菜「と、いうわけで、おかしやのみものをもらいにいったあと、

おんなのコだけのあつまりをすることにしました」

文乃「ブチヨークんとタヌキくん、

きつといまごろザンパン・・・ううん、ごちそうたべてるやるなー」

花菜「ヤミナベのコーヒーのにおい、ろっかまでただよってたね・・・」

笑魅「とりあえずっ、もってきた音楽でもながそっ」

文乃「ウチのもってきたんをながすわー」

花菜「音楽をかけてくれる、ふみのんちゃん。

音楽のかいせつをします、じゃんじゃんじゃかじゃかじゃんじゃん・・・」

音々「なんや、えらいワフウやなー」

花菜「このこえも、いちおう、かいせつします。

ええーむかしのながやにはあ、がくのないわかいしゅうちゅうのがおりましたえー」

文乃「(ガシャッ)ごめん、いまのきにせんといて」

花菜「音楽・・・?を、けた、ふみのんちゃん」

笑魅「なにっ?いまのっ?」

音々「ラクゴ?に、きこえたようなきが」

美優「あははははは〜〜〜なんでラクゴがながれたんやろ〜〜〜」

文乃「あはは・・・ははは」

笑魅「どんまーいっ」

花菜「こんどはかわりに、おとねえちゃんのもってきた、

いま、はやってる音楽がながれてきてます」

文乃「ウチもこの歌ー、すきやねんー」

美優「おかんも〜〜」

花菜「いい音楽だね・・・みんなすきなんだね」

音々「みんなでいっしょに、ボクのすきなおなじ音楽をすきになれたんやね。

それに、ボクのしゅみをしつてもらえてうれしいわあ」

笑魅「ヒーローのうたとちがってもっ、いいねっ。

そんじやつ、おんがくでもききながらっ、おかしたべよっ。

えみのもつてきたおかしっ、たべてっ」

花菜 「えみちゃんが、もつてきてくれたおかしをならべてくれました。

じゃがいもあげたものに、いろいろなあじのソースをつけてたべるみたいです」
笑魅 「つけるソースによってアジがかわるよっ、いろいろためしてっ」

文乃 「ありがとー、もらうなー。むにむに。これ、チリソースやねー、おいしいー」

花菜 「こっちは、からしマヨネーズ・・ペたぺた、もぎゅもぎゅ。おいしい」

笑魅 「どんどんたべてっ」

美優 「おかんのもつてきた~~~~~くだものも~~~~~たべてな~~~~~」

文乃 「わっ、このリンゴ、おおきーっ」

美優 「あじもえ~~~~~で~~~~~」

音々 「むしゃむしゃ。ホンマや、ミツができて、タネもなくて、なにより、あまい！」

花菜 「もぐもぐ。おいしい・・・」

笑魅 「しゃくしゃくっ。むむっ、リンゴといいつ、デカイヒトといいつ、

ずうたいばっかでかいっ。どうせっ、えんげいぶからもらってきたんだなっ」

美優 「ん~~~~~ん~~~~~。ほけんしつにきたおとこのコからもらった~~~~~」

一同 「みつぎものかっ」

音々 「どうりでやたらおいしいわけやわ」

文乃 「みやげもんかー、おいしいー」

美優 「たくさんもらってん~~~~~。どんどんたべてな~~~~~」

花菜 「おいしい・・・」

笑魅 「みてっ、えみっ、たくさんアクセサリーもってきたっ。ほしいひとにかしてやるっ」

花菜 「わっ、かわいい」

文乃 「どれもすてきー」

美優 「センスえ~~~~~」

音々 「これ、カバンにつけたいなあ」

花菜 「うわあ・・・」

文乃 「えみちゃん、センスえーなー」

笑魅 「えへへへっ、そっ? かりたいのいってっ、かすよっ」

文乃 「かりたいの、ごっつたくさんあるわー」

音々 「えみ、こんなしゅみをもつてたんやなあ」

笑魅 「まあねっ」

花菜 「えみちゃんのこと、ちよつとわかった・・・」

文乃 「いろいろあんのやねー」

美優 「そくそく。おかんな~~~~~、

ネコのしゃん~~~~、もってきたで~~~~~」

音々 「へえ、かわいいーなー」

花菜 「かわいい・・・」

音々 「みゆーのかつてるネコちゃんなん？」

美優 「う~~~~ん~~~~。まえかったたネコちゃんやねん~~~~」

花菜 「まえ・・・？」

美優 「ぎよねんなくなつてん~~~~」

花菜 「・・・」。

音々 「そつかあ」

笑魅 「えみのぜんっぜんっ、いらなくなつたネコのアクセサリーっ、

だれかほしいひといないかなっ」

花菜 「ネコ・・・」

笑魅 「ぜんっぜんいらなくなつたのほしいひとつ、いないかなっ」

美優 「もらつてえ~~~~ん~~~~？」

笑魅 「ネコなんてっ、どうせいらんからっ」

美優 「うあ~~~~~ありがと~~~~」

部長 「笑魅クンてば、ホントはそういうこなのだ」

花菜 「わっ、いきなりあらわれたブチョーくん」

笑魅 「どこからできたっ」

文乃 「えみちゃん、ヤミナベはたべんでえーんー？」

笑魅 「あんなコーシーのあじがするにがいナベっ、くえるかっ」

音々 「ああたがくれたんやがな」

花菜 「ヤミナベ、けつきよくどうしたの・・・？」

部長 「しんせんなお肉をば、たくさんほりこんで、

すべて珠輝クンのらんちにしたのだ」

一同 「もしやそれ、ぎやくたいなのかつー!？」

もちよりあつまり ↓ みんなであつまりもちよつたものでたのしむ ↓ おしまい

花菜 「そして、べつのひ。」

ブチヨークンのホントのなまえってなんなの？」

音々 「それがボクにもわからんのやわ」

文乃 「いもうとの、みゅーちゃんにもわからんねんてー」

花菜 「え、いもうとさんにも？」

音々 「そおやねんで。あのブチヨークン、ナゾがおおいやんなあ」

笑魅 「ねっねっ、えみのナマエってどうかくのっ？カタカナでっ」

一同 「なんにもつわものがひとり・・・！」

花菜 「そして、べつのひ」

文乃 「ウチらの楽校の、ふゆのせいふく、すごいかわいーねんでー」

音々 「ボクも、すごくかわいいとおもうわ」

花菜 「ホント？みてるの、たのしみだな」

部長 「あれはワタクシが、でざいんしたのだ」

一同 「って、アンタが力ヨッ！」

花菜 「そして、べつのひ」

文乃 「ウチらの楽校の、ふゆのしょくどうのうどん、すごいおいしーねんでー」

音々 「ボクも、すごくおいしいとおもうわ」

花菜 「ホント？たべるの、たのしみだな」

部長 「あれはワタクシが、シヨミをしてるのだ」

一同 「って、アンタが力ヨッ！」

花菜 「そして、べつのひ」

部長 「セイトカイチヨークンげんで、たったいまきめたのだ。おとねちゃボゲッ！」

花菜 「みゅーちゃんの掌底がブチヨークンのみぞおちにきまった」

花菜 「そして、べつのひ」

部長 「セイトカイチヨークンげんで、たったいまきめたのだ。おとねちゃドバツ！」

花菜 「ブチヨークンのからだから、みどりいろのものがふきだした」

花菜 「きょうは楽校のそとの、おとしよりむけ介護福祉施設まで、

大学院、幼稚部のひとたちといっしょにきています。

なぜわたしたちもきているかというと、

幼稚部の「」たちを、福祉施設までおくりとどけるためです」

笑魅 「わかりやすいっ、かいせつっ」

美優 「うまい~~~~」

花菜 「そういわれると、なんだか、てれる・・・」

子供 「おねえちゃんたち、もうかえんのー？」

笑魅 「おねえちゃんっ！？うれしいことをいってくれるっ」

花菜 「ふつうのいいかただとおもうけど・・・」

音々 「なな、えみからするとうれしいねんで」

花菜 「???」

美優 「幼稚部の「」たちって、なんで福祉施設までくることになったん~~~~？」

音々 「福祉施設のおじいさん、おばあさんたちとの、ふれあい会のためやで。

ふれあいをとおして、おたがいにいいことがあるように、ちゅうこっちゃで

美優 「な~~~~る~~~~ほ~~~~ど~~~~」

文乃 「つて、しらんで、ここまできとったんかいっ」

花菜 「大学院生のひとたちは、なんできてるの・・・？」

音々 「介護科のじっしゅうのためやねんで。ふだん学校でべんきょうするだけとちごて、

じっさいにやってみることをとおして、いろいろまなびたいんやるなあ

笑魅 「カイゴカかつ、なんのことかつ、よくわからないけどっ」

美優 「カイゴか~~~~。カンゴとちかいとこにある、ぶんややね~~~~」

文乃 「みゅーちゃんに、かんけーあるねー」

美優 「そやね~~~~」

音々 「ボクらの学校は、かんごしさんや、福祉かんけいのひとたちを、

ようせいするためのかていも、もっとなねんで。

みゅーが、ないぶしんがくできるとええなあ

美優 「そやね~~~~」

音々 「さてと、ぶじにおくりとどけたことやし、そろそろボクらはかえるかあ

笑魅 「どうせならっ、なんかしてかえるっ」

美優 「なんかつて~~~~いうてもな~~~~う~~~~ん、なにしょ~~~~」

文乃 「シヨクインさんのじゃまになっても、こまるしなー」

音々 「えみ、ここはあそぶための「」とちやうねんで

笑魅 「あそぶっていうよりっ、なんかやくにたてるようなことっ、したいっ」

美優 「おかんもくくなんかしてきたいわくくく。

かんごしさんになるうえでくくやくにたつかもくくく」

文乃 「なんかかー」

音々 「ううん、そやなあ、こういうときは、なのではんやね」

美優 「ななちゃんくくく、なんかえくくすまいるかんがえてくくく」

花菜 「ううん・・・そうだね、こういうときは・・・なにか・・・。

たのしんでもらうといいかもしれない・・・」

文乃 「たのしんでもらうってー？」

美優 「たのしむんとちごてくくくたのしんでもらうんくくく？」

音々 「どゆこっっちゃ？」

たのしみおくろう ↓ たのしんでもらうことでじぶんがうれしくなる

笑魅 「たのしんでもらうってっ、どういうすまいるなのっ？」

花菜 「ひとによるこんでもらうために、たのしいことをいろいろするっていう、

↓ こんなすまいる ↑ なんだ。

ゲンキをなくしてるひとにゲンキになってもらうとか、

こどもさんのあそびあいてをするとか、

おとしよりのかたによるこんでもらうとか、そういうのがいいかなって・・・」

音々 「ふんふん、そういうのなんやね」

花菜 「ひとにたのしんでもらうのが、じぶんにとってうれしくて、

そういうたのしんでもらうことをして、じぶんもすまいるになれるんだとおもう」

音々 「カンシンやなあ」

笑魅 「えみっ、そういうのすきだよ」

美優 「おかんもくく、ひとにたのしんでもらうのはすきかなくくく」

花菜 「 ↓ こんないいところ ↑ はっていうと、

ありがとうといってもらえるのがいちばんのたのしみで、うれしきなんだ。

じぶんがひとによるこんでもらえてるとか、

ひとのやくにたつてるとおもえるのもいいところだよ」

美優 「そういうのくくすきなほくくやわくく」

文乃 「みゅーちゃん、そんなかんじがするー」

音々「たしかに、みゅーにむいてそうやなあ」

笑魅「えみにもむいてそうっ」

花菜「↓ こんないるもの ↑ は・・・うーん、

たのしんでもらうことになってちがって、

たのしんでもらうことになって、かえることになるかなっておもっよ

音々「いろいろってことかあ」

笑魅「わかったっ」

花菜「↓ こんなやりかた ↑ をいうと、

ともだちにたのしんでもらうとか、かぞくのごどもさんやおやごさんに、
たのしんでもらうというのもいいことだとおもっし、

ほかに・・・おなじ職場のひとにたのしんでもらうのも。

福祉施設のごどもさんや、おとしよりのかたとか、

そういうひとたちに、たのしんでもらうのもいいことかなっておもっうんだ。

はなしあいてになるとか、おはなしをみせるとか、きかせるとか、

歌を歌うとか、がつきをひくとか、おやつをつくってもっていくとか、

そういうことをするとよろこばれて、たのしんでもらえる・・・」

文乃「じぶんがしてあげられるひとに、じぶんのできることをすればいいのかもしれないね」

花菜「そうだね・・・できることをすれば、ほんとにそれでいいとおもっ」

音々「なるほどなあ」

笑魅「どういうふうにしたのしんでもらうかつ、いろいろかんがえられそうっ」

花菜「すまいるをするため、みんなで福祉施設のなかをあるいています」

文乃「介護科のひとたちって、おんなのひとがおおいんやー」

音々「大学院生って、カッコええなあ」

花菜「オトナってきがするね」

部長「いやぁー・・・、ワタクシがハクシになるときに、

おとねえちゃんたらメロメロ!」

音々「へー」

笑魅「だれがバカをつれてきたっ。せきにんしゃでてこいっ」

美優「ごめんなくくくおかんやわくくく」

笑魅「おのれっ、デカイヒトがよんだかつ、

バカはヨウチブのごどもよりタチがわるいっ」

美優 「ブチヨーくんは、福祉施設でうるさくすると、

おかんがびよ〜いんまできゅ〜きゅ〜しゃでつれてく、
ってゆ〜てあるねん〜〜〜それでえ〜かな〜〜?」

音々 「まあそれでなら。いや、よくないか」

花菜 「ブチヨーくん、なんで福祉施設にきたの?」

部長 「イガク部をめざすワタクシとしては、いちどカイゴやイリヨウといったものに、
じっさいにふれて、たいけんしてみたかったのだ。あんどおとねえちゃんもいくから」

音々 「いちぶはマジメなリユウなんやな」

笑魅 「ならゆるすっ」

音々 「ほな、ここからはじゆ〜う〜う〜、ということだええ?」

一同 「おげ!」

笑魅 「えみっ、とりあえずっ、ヨウチブの、こどものめんどうをみてくるっ」

美優 「おかん〜〜そやな〜〜、おとしよりのかたのいるとこいって〜〜〜、
リハビリのおてつだいで〜〜〜シヨ〜ギのあいてしてくるわ〜〜〜」

部長 「むずかしいことをせず、シヨ〜ギするだけでじゆ〜うぶんなのだ」

音々 「ボクと、ふみのんのふたりでなにかしてこよかあ」

文乃 「そやねー」

部長 「ワタクシもば、ごどうこうさせていただくのだ」

美優 「きょうは〜〜〜わるさしんときや〜〜〜」

部長 「いえさ!まずは、ぎたあのえんそうをばして、みなさんにきいていただくのだ」
音々 「ブチヨーにそんなとくぎが」

文乃 「かっこいい」

部長 「いやあ〜〜〜っはっはっは。ぎたあこれくそん部のブチヨーだけあるのだ」

音々 「コレクションのほうか」

部長 「こうみえて、うでまえはなかなかなのだ。
なつかしの、むじくそんぐをばおひきして、みなさんにきいていただくのだ」

音々 「きたいしとく・・・って、なんでおおきいギターを福祉施設にもってきとんねん」

文乃 「たのしみー。ウチとおとねえで音楽にあわせて歌うわー」

音々 「それもええなあ、おもしろかあ。ボク、うたえるやるかあ」

部長 「うたえるよう、ゆうめいどころをば、おひきするのだ。」

じかんがあれば、おとねえちゃんへのらぶそんぐをも、おひきするのだ」

音々 「へー」

花菜 「みゅーちゃんといっしょに・・・、いっていい?」

美優「お〜〜げ〜〜。え〜〜で〜〜」

花菜「みゅーちゃんといっしょに、リハビリしつにいく花菜。

・・・で、つきました」

美優「おじいさん〜、シヨ〜ギのあいてします〜〜」

老爺「ちょうど、あいてをさがしとったんや。あいてしてくれ」

美優「は〜〜い〜〜。ところで〜〜ななちゃん〜〜、

シヨ〜ギって、シロとクロをうらがえすんやったっけ〜〜?」

花菜「なぬ、それも知らないでっただいに来たの?」

老爺「まず、コマをならべて、それをうごかして・・・なんとらんたら」

美優「おじいさん〜、おしえてくれて〜、ありがと〜〜ございます〜。

へたですけど〜〜よろしくおねがいます〜〜」

花菜「リハビリうけたほうがいいかも・・・みゅーちゃんが・・・」

老爺「おしえるのも、リハビリになるんや、ありがたいで」

花菜「それにしてもなんだろ、かべのむこうのとなりのへやから、

めちやめちやおおきな、エレキギターのおとが・・・」

美優「あはははははは〜。

アンプとスピー〜カ〜、どうやってもってきたんやろ〜〜」

花菜「ううん、ふしぎ・・・」

みゅーちゃんがシヨ〜ギをおそわっていて、ひとりになった花菜・・・

みゅーちゃん、わたし、ほかのどこにいくね

美優「うん〜〜」

花菜「で、ひとりになった花菜はほかのへやにいます・・・」

どうしよう・・・。わたしなんて、なにもできることないのに・・・」

老婆「おじょうちゃん、どうしたん?」

花菜「えと、あの・・・おばあさん、ベッドにねたきりみたいですけど、

なにかしてほしいこと、ありませんか?」

老婆「いまのところは、べつにないわ」

花菜「そうですか」

老婆「蒼遙楽校の「なんやね」

花菜「はい、そうです」

老婆「おかし、いらんか?」

花菜「いえ、すいません、わたし・・・、

かってにもらうわけにいかなくて・・・ごめんなさい・・・」

老婆「蒼遥の口はみんなゲンキやっていうはなし、ようきくわ」

花菜「あ、そうですか……」。

あのこと、おばあさんも、ゲンキそうでうれしいです」

老婆「そう？こうみえても、ね。だいぶカラダのわるいのがつづいとんのやわ」

花菜「あ、あ、あ、あの、すいません！むしんけいなこといって！」

老婆「ええで、ええで。まだまだわかいなあ、ええことやで」

花菜「こどもなんです、わたし。なんにもしらなくて。」

それに、さっきもいろいるともだちにいつてたけど、

じっさいには、わたし、みんなとちがって、なにもできないんです」

老婆「じゅうぶん、がんばるとるし、やくにたつとるで」

花菜「え？」

職員「タカハシさん、にゆうよくのおじかんですよ」

老婆「おじょうちゃん、ありがとう、ほなな」

花菜「あ、はい、ありがとうございました。」

……どこかへ行ってしまった、おばあさん。

……わたし、やくにたてたのかな……」

たのしみおくろう ↓ たのしんでもらうことでじぶんがうれしくなる ↓ おしまい

花菜 「そして、べつのひ」

笑魅 「やつほーっ、シタッパっ、まだいてたかつ」

珠輝 「ふおっふおっふおっ。さっきからずっとここにおったぞい」

花菜 「そして、べつのひ」

笑魅 「やつほーっ、シタッパっ、まだいきってたかつ」

珠輝 「ふおっふおっふおっ。としはえみちゃんと、ほとんどかわらんぞい」

花菜 「そして、べつのひ」

笑魅 「やつほーっ、シタッパっ、まだいきしてたかつ」

珠輝 「ふおっふおっふおっ。こきゅうをやめるときはプールのときくらいじゃぞい」

花菜 「そして、べつのひ」

珠輝 「べっぴんさんのななちゃん、鯛で鰻でもどうじゃ?」

花菜 「イワシでアジってどういうこと・・・?」

花菜 「そして、べつのひ」

珠輝 「鰻をもってきてくれれば、はなしをきくぞい」

花菜 「そんなに、さかながすきなんだね」

音々 「はなしをきくって、ええんかい、そんなこというてからに」

花菜 「そして、べつのひ」

音々 「楽校の女子のにんきでは、ブチヨー派とタヌキ派のハバツでいうと、

ほとんどがどっちでもない派」

花菜 「そして、べつのひ」

珠輝 「かわゆいななちゃんに、コーシーグーヌーをさしあげますわい」

花菜 「ありがとう・・・コーシーグーヌーって、なにこれ?ド口みず・・・?」

花菜 「いま、おとねえちゃん、ふみのんちゃん、わたし……の3にんで、

楽校からかえろうと、ゆうがたに楽校のいりぐちのちかくをあるいています」

文乃 「ななちゃん、かいせつありがとうー」

音々 「ななのかいせつ、まいどうまいなあ」

花菜 「そう？なれてきたのかな」

文乃 「きょうもたくさんべんきょうしたわー」

音々 「べんきょうしたという、そんなきがするだけのきがするわ」

花菜 「ゆうやけがきれい……」

文乃 「そやねー」

音々 「きぶんが、おせんちになるなあ」

部長 「いやぁー……かがやくゆうひがまぶしい！」

文乃 「あつ、ブチヨーくん」

部長 「いやぁー……はっはっはっは。ぐいぶにん、おとねえちゃん、みなさん

音々 「いやは」

部長 「いやぁー……どらまてくな、このゆうひ！」

ワタクシとおとねえちゃんがせーしゅんどまんなか！」

音々 「へー」

花菜 「いいふんいきが……」

音々 「せっかくいいいきぶんやったのにな」

部長 「それはそうと、おとねえちゃん、みなさん。ただいま楽校のいりぐちのまえで、

えんげき部のみなさんが、えんげきと、かみしばいをひろうしているのだ。

ぜひみていってほしいのだ」

文乃 「さすがブチヨーくん、えんげき部ブチヨーとしてのつとめをがんばってるね」

音々 「つとめってゆうほど、そんなありがたいもんなん？」

部長 「ワタクシ、ゆびにんぎょうで、おとねえちゃんとワタクシがでてる、

おとねちつくらぶすとーりをば、ただいまえんじておりますのだ」

音々 「へー」

花菜 「えんげきをしているちかくで、ブチヨーくんがゆびにんぎょうげきをしています。

おとねちつくらぶすとーりをみてるの、えみちやんだけみたいです」

笑魅 「バカっ、はやくつづきつづきっ、つづきしろっ」

部長 「いやぁー……おとねえちゃんから、えみちちゃんからと、

ひくてあまたなワタクシ、おとめなかせ！」

音々 「へー」

花菜 「あ、あれは……。ゴメンなさい、とおくでタヌキくんもみてました」

部長「いやぁー！ー珠輝くん、こちらへかもん！」

珠輝「ひっそりみてたんじゃがのお。バシたみたいじゃな。いやっはあ、みなさん」
文乃「いやっはあ、タヌキくん」

音々「いやはタヌキ」

珠輝「このゆびにんぎょうげき、みててけっこうたのしいぞな」

部長「わかるひとには、わかる！このすんばらしいじゅんあいげき！」

珠輝「げんじつではアイゾウゲキとなりそうじゃがのお」

音々「そんなもんか」

珠輝「ふおっふおっふおっ」

笑魅「このおはなしはっ。セイシユングンゾーゲキであるっ」

文乃「そーなんー？」

部長「このおはなしは、おとねえちゃんとワタクシをちゅうしんとする
せいしゅんじゅんあいものがたりなのである！」

音々「へー」

珠輝「ううむ、そうじゃったかのう？」

音々「ちやうやる、あきらかに」

笑魅「トガキっ、えみもこういうっ、おはなしつくるのっしたいっ、

えみにできそうなそういうっ、おてがるでたのしいすまいるっ、かんがえてっ

珠輝「そじゃの、そういうすまいるをこさえてもらえると、ワシもたすかるので」

音々「えみのために、ボクからもたのむわ」

部長「ほーぞい！」

文乃「ななちゃんがかんがえるか、たのしみー」

花菜「うん、そっか・・・なら・・・そだね・・・」

うん・・・みんなのおはなし・・・っていうのを、かんがえてみるね・・・

みんなのおはなし ↓ ほんとにいる人がでてくるおはなしづくり

笑魅「でっ、どんなすまいるなのっ」

花菜「どういうすまいるかっていうと、 ↓ こんなすまいる ↑ で、

ホントにいるひとたちがでてくる、そういうおはなしをつくるすまいるなんだ

文乃「ブチヨーくんがいまやってたのみたいなんやねー」

花菜「うん。ホントにいるひとをおはなしにださせることだ、

おはなしが、てがるだけどたのしいものなるかなっておもっ

笑魅 「バカとガリベンがでてくるはなしっ、おもしろいよっ」

珠輝 「ワシも、じっさいにいるひとたちがでてくると、おもしろくなるとおもっわい」
笑魅 「じぶんでかんがえたおはなしがっ、

かんたんにいいものになるっていうのがっ、よさそっだねっ」

部長 「花菜クン、いいとこのかいせつをば、ひとつよしなに」

花菜 「そだね・・・ ↓ こんないところ ↑ は、

ホントにいる人たちを、つくりもののおはなしにださせることによる、

ふつうのおはなしとはちがう、わらいやたのしみ、ジーンとくるかんじが、
いいとこなんじゃないかなっておもっよ。

それと、じぶんでかんたんにおはなしをかんがえて、つくることができ、
それをひとにみせるたのしさもあるとおもっよ」

部長 「らじゃー!」

花菜 「うん・・・」

音々 「いるものをおしえてほしいねんけど、どんなんがいるん？」

花菜 「 ↓ こんないもの ↑ をいうと・・・。」

ノートがあると絵をいかにかみしばいにできるし、

ノートがあればもじをいかいて、おはなしをもじでつたえられるとおもっよ。

ビデオカメラがあればホンカクテキなものもつくれるかな。

ものがなくても、くちでおはなしをはなしてもいいよ」

部長 「おてがるにも、ホンカクテキにもなのだ」

珠輝 「いろんなひとがたのしめそじゃのお」

文乃 「くちではなすだけでもええねんなー」

文乃 「じっさい、どうやってつくるんー？」

花菜 「 ↓ こんなりかた ↑ はね、

おはなしをかんがえてつくって、そしてできあがったものをひとにみせるんだ。

てじゅんはむずかしくなくて、かんがえて、つくって、みせるだけなんだ。

かみにコトバをいかいてみせるというのもひとつのやりかたで、

くちでいうのもひとつのやりかたかな。

絵にいかいて絵本やかみしばいにしてもたのしいよ。

はなしは、ながくてもみじかくてもいいんだ。

ともだちといっしょに学校のやすみじかんをつかって、

ともだちみんながでてくるおはなしをかんがえてマンガにしたり、
ことばやもじでの、みじかいおはなしにしてもいい。

あらすじをかんがえないで、おはなしにでてくる人たちみんなが、
じぶんのやくのキャラになりきって、そのばのおもいつきで、

おはなしをはなしことばでつくりあげていくのも楽しいかなっておもう」

珠輝「みじかいのならワシでもつくれそうじゃの」

花菜「すでにあるおはなしに、でてくるひとだけかえて、

いまもう作られている、むかしばなしやマンガのおはなしを、

キャラだけかえてつくるというのも楽しくて、おてがるなんだ。

そういうのをかんがえて、おとなのひとが、こどもさんといっしょにねるときに、
むかしばなしのしゅやくをこどもさんにかえてはなしてあげると、

よろこばれるとおもうよ。

4 コママンガのもうできあがってるものを、

キャラだけかえるとわらいにつながって楽しいっていうたのしみもあるし、

ひとりでいるときに、恋の物語の主人公と相手を、

自分と、恋仲になりたいひとにかえてよむとドキドキできるよ」

笑魅「でてくるひとをつ、とつかえるだけならかんたんだねっ」

珠輝「じぶんでかんがえても、でてくるひとだけかえても、どっちでもいいんじゃないの」

音々「おてがるやなあ」

笑魅「つくるぞっ、さっそくっ」

花菜「おやくそくなので、いつもどおり、みゅーちゃんをつれてきました」

美優「いや〜〜は〜〜みんな〜〜」。

たのし〜おはなしをつくるっていわれて〜、きたで〜」

笑魅「くんたっ、かえれっ」

文乃「まーまー、えみちゃん」

音々「おちつきいや、えみ」

美優「おかん〜いまから〜いえへかえるとこやで〜」

文乃「うまいなー」

珠輝「じょうずにいうのお」

美優「なにがじょうずでおいしいん〜」?

文乃「かえるっていうたん、てんねんかいなっ」

音々「みゅーのてんねんでんせつが、またひとつ」

部長 「みんなでかんがえるのだ、つくるのだ、みせるのだ」
一同 「らじゃー！」

笑魅 「えみっ、ひとをおきかえるのをやってみるっ」

音々 「ボクは、いちからかんがえよかな」

珠輝 「えみちゃん、ワシもいっしょにつくってかまわんかの」

笑魅 「いいよっ」

珠輝 「ワシがおはなしをノートにかいていくでの。」

おはなしをかんがえるのは、えみちゃんにまかせるわい」

笑魅 「ありがとっ」

音々 「ボク、ノートにかんがえたのをかいてって、あとでじぶんでよみあげるわ」

美優 「みんなの……たのしみ……」

文乃 「たのしみやわー」

花菜 「で、えみちゃん、おとねちゃんのふたりが、

15ふんくらいたって、おはなしをつくりおわりました」

笑魅 「おきかえるだけでっ、つくるのっ、かんたんだったっ」

音々 「ボクもけっこうすぐつくれたで。みじかいからかなあ」

部長 「ワタクシにみせるのだ！」

美優 「みんなの……たのしみ……」

珠輝 「みゅーちゃん、おなじことを2かい、いうとるぞ」

美優 「そやったっけ……」

音々 「みゅーのてんねんでんせつが、またひとつ」

珠輝 「まず、だれのはなしをよむのかの？」

笑魅 「じゃっ、トガキっ、えみのをよんでっ」

花菜 「わたしがよむの？うん、じゃ……みんな、じゅんびいい？」

一同 「おげー！」

花菜 「だいいい、えみこちゃん……はじまりはじまり。」

むかしむかしあるところに、シタツパじいさんとミスメガネばあさんがいました」

音々 「なんなんだか、ミスメガネばあさんて」

花菜 「おばあさんがみずうみでチョコをたべていると、チョコのなかから、

それはそれはアイドルみたいなかわいらしいおんなのこがでてきました」

文乃 「あぶなっ、ウチ、おんなのこをもうすこしでたべるとこやんっ。」

それにしても、アイドルみたいなおんなのこ、えみこちゃんとなづけよう。

えみこちゃんはブチョたいじにいきたいのかえ？」

笑魅 「えみこちゃんっ、いきたいっ、いくよっ」

花菜 「えみこちゃんはおともの、

ウシのトガキ、ブタのガリベン、ニワトリのデカイヒトをしたがえ、
ブチヨたいじへとでかけました・・・わたし、ウシみたいなのかな・・・

・・・ウシはシヨックをうけましたモー」

音々 「まあ、ボクもブタやし、いいっこなしということできこブー」

美優 「たべものになるいきものばっかやね〜」
「ケツコ〜」

花菜 「えみこちゃんは、ブチヨのすむ、ブチヨのへやへとたどりつきました」

笑魅 「えみこちゃんっけんざんっ。ブチヨはどこっ」

部長 「がおー、ブチヨなのだ。ないすとみっ、えみこちゃグハっ！

なんとっ、たたかうの、さっそくっ」

笑魅 「けちよんけちよんにするっ」

花菜 「えみこちゃんとブチヨのらんとウシーン・・・いっぽうてきにやられるシーン？

・・・は、こどものきょうじょうよくないため、しょうりやくします」

文乃 「みじかっ」

笑魅 「トガキっ、けずるなっ。てっとりばやくおわらせたかったんかっ。

いちばんのみせばは、らんとウシーンなんだぞっ、ぶんぶんっ」

花菜 「そしてえみこちゃんは、こらしめたブチヨからたいりょうのおかしをまきあげ、

もちかえったあと、おじいさん、おばあさんにおかしをあげることなく、

ひとりじめしてたべましたとさ。

それと、おとものさんびきにおやつをあげてふとらせて、

あとあとのしみだなあとおもいましたとさ。

それと、えほうまきたべたい。おしまい。・・・ひどい」

美優 「あはははは〜。たべものことばっかやった〜」

珠輝 「ワシなんか、わざわざ、やくづくりしたのにセリフなしじゃぞ」

文乃 「あははははー。おじいさんになるの、はまりやくなのになー」

笑魅 「つぎのおはなしっどうするっ？」

音々 「ボクが、かんがえたのをいうわ。

みゅーが、かんごしさんになったあとのはなし。

だいたいは、みゅみゅさん、かんごしさんになる」

美優 「おかんのはなしか〜〜〜〜うれし〜〜〜」

笑魅 「デカイヒトかっ」

花菜 「あんしんしてみれそう・・・」

部長「りすんぷりいずー!」

珠輝「みゅーちゃんじゃな」

文乃「どきどきー」

音々「これは、蒼遥楽校のみゅみゅさんというおんなのが、

かんごしさんになったあとのおはなしです。

かんごしになったあとのみゅみゅさん、まいにちしごとにおわれています。

『たいへんやわ〜しんどいわ〜〜〜あ〜〜〜』

あたまのなかでもいえがいていたことと、

げんじつとのあいだでくるしむまいにち。

あるひ、おくすりをかんじゃさんにわたしまちがえ、

じょうしの、かんごしちようさんにこっぴどくおこられます。

『こんなこともぎんのかっ、どめほっ』

おちこむみゅみゅさん。あきらめていなかへかえろうとおもったりします。

でも、まだつづけたいというきもちもつよく、あきらめきれません。

『グッスン・・・』

そしてあるひ、かんじゃさんからこんなことはをいわれます。

『みゅみゅさんほ、ちつもニニニしてていいね。』

みゅみゅさんがいてくれるだけで、こっちもゲンキになれる。

みゅみゅさん、かんごしさんがいちばんむいてるしごとだよ

みゅみゅさんは、そのことばをきいて、

やっぱりじぶんはこのみちにすむべきなんだとおもえました。

そしてまた、みゅみゅさんは、まいにち、かんごしさんとして、

ニニニとし、まわりにゲンキとえがおをくばることにしたのでした。おしまい

笑魅「ぐずっ、なけたっ」

花菜「そぼくだけど、いいはなし・・・」

珠輝「ございくしてないところが、ええのお」

文乃「ウチ、うるっときたわー。なんでやるー」

音々「あほみたい、ボク、じぶんでつくってじぶんでいうて、

それやのに、なんかなきそうやわ」

美優「おとねえちゃん、おかんな、ごっつい、うれしかったわ〜〜〜。

いまのはなし、これからずっと、わすれんでおぼえとくわ〜〜」

部長「こころがこもっていたのだ」

みんなのおはなし ↓ ほんといにいる人がでてくるおはなしづくり ↓ おしまい

笑魅 「シヨクドウでまいにちおいしいもんっ、タダでたべるためかっ」

音々 「えみはホンマに、そういうりゆうでボクらの楽校にてんこうしてきてそうでこわいわ」

花菜 「わたしは・・・いえのしごとのつごう・・・おやがテンキンして・・・」

美優 「へ～～～～そくなんや～～」

笑魅 「えみもてんこうしてっ、このガッコウにきたんだよっ」

文乃 「えみちゃん、がいこくそだちなんやんねー。まえはどここの国にすんでたんー？」

笑魅 「ウマイヨ・メチャウマイ・キョーワコクってとこっ」

音々 「そこ、ちゃんとちきゅうにある国なん？」

文乃 「えみちゃんにあってやねんってツッコミたいけど、えみちゃんのことやから、

そのナントカキョーワコクっていうのは、きつとボケとはちやうんやるなー」

音々 「みゅーこそ、なんでウチの楽校をえらんだん？」

美優 「おかんがこの楽校をえらんだのは～～」。う～～～～ん。なんでやったかな～～。わすれたわ～～」

音々 「んだいじなこと、わすれるとは」

文乃 「みゅーちゃんにあってやねんってツッコミたいけど、みゅーちゃんのことやから、

そのわすれたっていうのは、きつとボケとはちやうんやるなー」

音々 「みゅーのてんねんでんせつが、またひとつ」

花菜 「わたしがこの楽校にてんこうしてきた、

べつにあるもうひとつのわけ・・・いえない・・・」

花菜 「そして、べつのひ」

部長 「えがおをみせるというのは、じぶんとあいてがなかよしであるということ、

あいてにつたえらるということなのだ」

花菜 「・・・」

花菜 「そして、べつのひ」

音々 「ブチョーなんかは、なにかんがえてニヤついとんのかしらんのやけど、

きつとみんな、むじゃきにホントのえがおをみせてくれるとおもうで」

文乃 「ホントのえがおかー。どんな人でも、きつとどこかでそういうかおしてるんやるなー」

花菜 「・・・」

花菜 「・・・」

花菜 「・・・」

花菜 「・・・」

花菜 「・・・」

花菜 「・・・」

花菜 「・・・」

花菜「そして、べつのひ」

珠輝「楽校で、みゅーちゃんのファンむけグッズがはっばいされれば、
たくさんうれそうじゃのう」

文乃「あんなきれいな人やったらうれやるねー」

音々「すでに、みゅーの楽校ファンクラブができあがってるとかできあがってないとか。

まあでも、ボクのファングッズは、はっばいされても、かうひといいひんやるおなあ

文乃「ウチのもいーひんねー。でもウチのなんてどうせ、はっばいされへんわー」

笑魅「えみのはっ、だいにんきっ。しなぎれがゾクシュツっ」

音々「たいしたじしんやな」

文乃「みゅーちゃんグッズのうりあげは、

ウチという、みためにめぐまれないひとのためにキフされます」

珠輝「ふおふお。わしもごじまんのかみをきってモヒカンあたまにするから、

わしのとこにキフしてもらえるかのう」

文乃「あははははー。モヒカンー、かっこいいやんー」

笑魅「あはははははっ！えみのばあいつ、みためにめぐまれてるよっ、キフをもらえないっ

音々「ホンマにたいしたじしんやな」

文乃「えへえへー」

部長「じよいなす！花菜くんもはなしにはいつてくるのだ」

花菜「う……」

音々「そやね。こういうのに、なれていかへんと、ね」

花菜「……」。

花菜「そして、べつのひ」

部長「おあいそわらいだって、おどろけにふるまうことだって、ときにはひつようなのだ」

珠輝「そうかしれんのう」

花菜「……」。

ひとそしてねがい ↓ 花菜が楽校にいかなかった日

花菜 「きょうはなんだか、からだのちようしがよくないので、

楽校をやすみ、いえでひとりで、おとなしくしている花菜です。

・・・って、なんでじぶんでじぶんのことをじぶんひとりでじぶんのいえで、
かいせつしてるんだろ・・・ヘンなクセだな・・・。

これから花菜は、れいぞうこにいられてある、きのう、えみちゃんからもらった、
コーシーグーヌーをのみにいくところです。あった。のみます、ぐびぐび。

・・・またかいせつしちゃった。

ん、げんかんのチャイムがなったみたいです、げんかんまでむかう花菜

笑魅 「トガキっ、いるかっ」

花菜 「えみちゃん、どしたの？」

笑魅 「きのうあげたコーシーグーヌーの、しょーみきげんが

イッカゲツくらいすぎてるっ。のむときはきをつけたほうがいいよっ

花菜 「そうなんだね、おしえてくれてありがとう・・・え？いつかけっ？」

もうのんだよ。しかも、きのうも、きょうものんだ

音々 「つまり、えみがすでにくさっとするもんをあげて、

しかもそれをなながのんだからこっとなつたということやな

花菜 「あ、おとねえちゃん、どしたの？」

文乃 「おみまいにきたでー。

たぶん、やすんだん、コーシーグーヌーのせいやおもたわー

花菜 「ふみのんちゃん、おみまいにきてくれたんだね、ありがとう」

文乃 「うん、きたわー。やっぱり楽校でマジミの3人がそろわんと、おちつかんかったわ

美優 「おなかいたにきくクスリくくもってきたでくくく。はい、のんでやくくく」

花菜 「ありがとう・・・もらうね、ごくごく・・・うん、きいたきがする」

部長 「みゅーちゃん、そのクスリ、しようきげんが14年ほどすぎてるのだ」

美優 「えくくくくそくくくくく？あ、ほんまやくくく、ごめん、ななちゃんくくく」

花菜 「なぬ、そうなの？もうのんじやった」

珠輝 「ハコのいろがあきらかにふるそうじゃのう」

音々 「みゅーのてんねんでんせつが、またひとつ」

笑魅 「んなクスリのむとっ、コーシーグーヌーよりっあぶないっ」

音々「もとはといえば、あたのあげたコーシーグーナーがわるいんやがな」
笑魅「しょーみきげんがすぎててもっ、ゆがいてのめばっだいじょうぶっ。

それがセイカツのチエっ。たぶんっ」

文乃「むりやるー」

音々「ゲスイシヨリジヨウでも、とおさんかぎり、のめへんわ」

笑魅「どんまーいっ」

花菜「きをつかってくれた、そのきもちは、すごくうれしいよ……。

それはそうと、みんな、いえにあがってあがって。

よるおそくまで、かぞく、かえらないから」

笑魅「じゃまするっ」

一同「おじゃましまーす」

花菜「わたしのへやに、はいって」

一同「らじゃー!」

花菜「わたしのへやにくる、おみまいにきてくれたみんな」

珠輝「おんなのコのへやにはいるの、はじめてじゃ」

文乃「ウチらみんな、ななちゃんのいえにくるの、はじめてやねー」

珠輝「はじめてといえば、ななちゃんが楽校をやすむなんて、はじめてのことじゃの」

笑魅「トガキっ、えみのあげたコーシーグーナーのせいであ、やすませてごめんっ」

花菜「ううん、からだのぐあいがわるいの、たぶんそのせいとちがう……」

笑魅「そっかつ、ちょっとあんしんしたっ」

文乃「14年まえのクスリのわるいこうかがきになる……」

笑魅「あとお、レモンもってきたっ、ビタミンおおいよっ」

花菜「ありがとう……え、レモン?」

音々「こういうときのいばんはメロンなんやけど、

からだにいいものをつてかんがえて、みんなでレモンにしようってきめてん

花菜「うれしい、ありがとう。レモンとメロン、なまえがにてるね」

文乃「ダジャレネタにつかえるわー、おぼえとこ」

音々「ネタにすんのかいな」

美優「鉄分のほくは、だいじょうぶく?」

花菜「うん……」

部長「くさつてないコーシーグーナーをもってきたのだ。みんなでのものだ」

一同「いただきまーす、ごくごく」

笑魅 「がぶがぶがぶっ・・・うっはーおいしいっ、

もーいっぱいっ、めーいっぱいっ、ちょうだいっ」

文乃 「うーん、えみちゃん、ひとつんちやでー」

音々 「あつかましいやる」

笑魅 「どんまーいっ」

音々 「じぶんでゆうか」

珠輝 「みなのしゅ、アジはいかがかのか？」

音々 「こらっ」

珠輝 「ふおっふおっふお、ダジャレじゃ、じょうだんじゃ」

音々 「じょおだんかどうか、よおわからんわ」

文乃 「わるいこやなー」

文乃 「ななちゃんの、すまいるをかんがえるのにつこてる、

メモちょうか、ノートかなにかあるなら、みしてほしーわー」

花菜 「うん、そこにおいてあるよ」

音々 「うわっ、すごいりょうのノート」

美優 「こんなにく〜あるんや〜」

花菜 「かんがえてほしいってみんなにいわれて、

そのばでおもいつきでかんがえることもおおいよ」

笑魅 「スゴっ」

音々 「いつもあれだけ、そのばでおもいつけるなんて、あたまのかいてん、よすぎやなあ」

花菜 「???」

笑魅 「トガキってっ、どうしてそんなにがんばってっすまいるをかんがえてるのっ?」

花菜 「・・・なんにもできないから、かな。わたしはなんにもできないし、

すまいるをあいだにはさまないと、みんなとなかよくなれないんだ。

でも、すまいるをかんがえて、みんなにしまってもらって、そうすることで、

それで、みんなとなかよくなれるから、かんがえてるんだ。

すまいるをしまってもらうことでもなかよくしてもらえるし、

それに、すまいるをいっしょに楽しむことで、

みんなとなかよくだのしんでいられるし・・・それでだよ。

そうしないと、わたしがホントにちゃんとなかよくしてもらえるか、わからない」

音々 「そっかあ」

部長 「すまいるをとおして、みんなとなかよくなりたかったのだ」

花菜「それに、まえみたいになりたくなかったから」

文乃「まえかー」

笑魅「まえってっ?」

音々「こらっ、えみっ」

花菜「わたし、まえにかよった学校で、みんなとうまういかなかったんだ。

ずっとひとりだったし、なかまはずれにもされたし、まいにちひとりでないでた。いやなことされたし、だれもたすけてくれなくて、

じぶんなんてうまれてこないほうがよかったって、おもったこともある」

笑魅「トガキにひどいことするってっ、ゆるせないっ、そんなのサイテイだよっ。

なかまはずれにしてっ、そのひとにいやがらせするなんてっ、なにそれっ。

トガキはなんにもわるいことしてないのにっ、

ひどすぎる・・・ひどすぎるよ・・・、うう・・・かわいそう・・・、

ひどいよ・・・なんにんもで、なかまはずれに、する、なんて・・・。

いやなことまでして・・・そんなの・・・ゆるせない・・・、

ひどい・・・うっ・・・うっ・・・ひっく・・・」

文乃「うんー」

音々「そうやおもったわ」

美優「おかんもっ、そうなんとちゃうかってきがしてた」

花菜「こんどはもう、だれからもなかまはずれにされたくなくて、

それでいまの楽校にきてから、いままでずっと、すまいるをかんがえてたんだ」

笑魅「ひっく、えぐ・・・いままで・・・トガキのこと、

からかってきて・・・ゴメン・・・。

・・・トガキなんていいかた、しなぎやよかった・・・。

そんなリユウがあるなら、えみたちがひまなとき、

トガキにすまいるをかんがえてなんて・・・、

かるいきもちでゆって・・・ゴメン・・・う・・・う・・・」

音々「いや、そんなきにせんでええ」

部長「花菜クンは、みんなとなかよくなれたのだ」

笑魅「・・・?」

音々「うん、なのかんがえたすまいるは、ともだちになれるすまいるやで」

美優「ほかに、みんなのやくにたつすまいるもっ」

文乃「そうだよ、そのばにいるみんながもつとなかよくなれるすまいるもやわー」

珠輝「そうじゃ、いいおもいでをたくさんくれるすまいるもじゃわい」

部長「それだけでなく、たいせつなことにきづかせてくれるすまいるなのだ」

音々「ななとボクが、なかよくなるなんてこと、

そんなんありえへんで。みんなもそうおもとる」

文乃「ウチがななちゃんと、ホンマにホンマになかよしやってこと、

ななちゃん、しつてくれるとおもうわー。そのこと、しんじてほしい」

美優「そやで〜、それにな〜、おかんは〜、ななちゃんやったら〜、

もうだいたいようぶやっておもうわ〜」

珠輝「ワシもそうおもうのう。もし、ななちゃんにわるいことするのがいたら、

ワシがせおいなげしてこらしめちゃうわい」

部長「こわがることもふあんになることもしなくていいのだ。

みんな、花菜クンのところから、はなれていかないのだ」

笑魅「トガキはみんなのなかよしなんだよっ。

もうっ、なかまはずれにされることなんてっ、ぜったいにないっ」

一同「ななちゃんは、いま、ないてる。でもこれからはわらってわらって、ね？」

花菜「・・・スマイル?・・・うん、うん・・・すまいる、すまいる!」

笑顔♪ ↓ 純愛♡ ↓ 青春☆ ↓ スマイル? ↓ すまいる! ↓ おしまい